midKnight tale ーカノジョは狼女!?ー

Rev crazy dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｍｉｄＫｎｉｇｈｔ　ｔａｌｅ　ーカノジョは狼女！？ー

【Ｎコード】
Ｎ６５１５Ａ

【作者名】
Ｒｅｖ　ｃｒａｚｙ　ｄｒｅａｍ

【あらすじ】
全てはあの夜から始まった…普通…ではない少年山本雅人〔やまもとまさと〕の住むアパートに傷を負った子犬が空から舞い落ちる…そして満月の夜の光に照らし出され…その姿は少女へと変貌する。その夜から雅人の人生は…ホラー！？コメディ！？ファンタジー！？この夏今までにない夜を！！見ないと今夜眠れませんよ…？

前夜祭　ープロローグ！？ー

夜空に輝く漆黒の月夜…。

そんな何が出てもおかしくない、そんな夜。少年はそこにいた…。

「遅ぇ…。杏樹のやつ、こんな寒い中何分待たせんだ？」

寒々とした風の吹く中、少年は人気の無さそうな公園にいた。

やたらと気の荒い少年である。短くツンツンと立った髪で今で言うイケメンである。

少年の名前は山本　雅人［やまもと　まさと］。

人は彼をこう呼ぶ…。狂人、核兵器、地上最強の…以下略。

と呼ばれるほどの危険人物である…

雅人はむっとしたまま、ケータイを取り出し自分をここまでイラつかさせる人物の番号を押した。

……出ない。

雅人は溜め息をついた後、血管を首筋に立て辺りを見回した。

そこには子犬が一匹歩いてた。いや、犬と言うよりはそう、［子狼］と呼んだ方が良いだろう。

「なんだ…狼か」

しかし、雅人は見逃さなかった。今の日本に狼などいるはずがない。雅人は神速のごとく狼を捕まえた。

「さぁ～って…。」

雅人はケータイを取り出し先ほど行った電話をする行為を繰り返した。

［プルルルル…プルルルル。］と機械音が夜空に響く。

雅人はこの行為がどういう事か自分でも面白くなった。

「わぅ？」

とぼけたように狼がわざとらしくかわいこぶる…。

ゴン！！

「った～い！！？ちょ、ちょっと！雅人君！？」

狼が喋る…これほど非現実的な事はないだろう。

だが雅人にとってはどうでも良かった。

「あのさ…まず日本に狼がいるかっつーの！！そして狼はケータイなんか持たねぇ！！」

雅人は狼のコメカミめがけてかなりグリグリした。

「どーしてお前はいっつも…。」

「い　いたいたいた！痛いって！！ゴメン！遅れたのは謝るから！ちょっと戻させて！！」

狼はそう言うと満月へと背を向ける。

その瞬間…狼は月夜の光に包まれ、徐々に狼から少女へと姿を変えていった。

「ご、ゴメンね？雅人君…ちょっと道が混んでて…え…？ど、どしたの！？」

「まずは自分の姿を確認してからにしろよ…。」

少女はその言葉の意味にようやく気づいた…。
さっきまで狼の姿をしていたのだから服など着て……

「ちょ！ちょっと女の子に恥かかす気！？」

「ナニフザケタコトイッテルンデスカ？」
雅人は再びグリグリした。
その少女はそこら辺にいるような今風な女の子とは違う雰囲気を持っていた。
銀色の瞳、異常に長い八重歯（まぁそれは牙なのだが…）全てが常識の枠から外れているようだった。
「いいわけなんて聞くかー！！」
「あっ、いたいいたいた！ゴメンなさい！ゴメン！」
今はこんな感じなのだが…
雅人は思った。
（何でこんな事になったんだろう…）
その答えは考えるまでもなくすぐに出てきた。
カノジョは人ではないのだ。
普通の人であればこんな厄介事はゴメンだろう。

だが雅人も普通ではなかった。

（答えなんてもう出てるんだ。だから俺と杏樹はここにいる…。）

そう、それはあることがキッカケだった。

…それは突然やって来た。

出会い…。

世界…いや、全てをかけた戦い。

この物語の始まりは…そう。
あの夜から始まった…。

そう…あの満月の夜から……

前夜祭　ープロローグ！？ー（後書き）

皆様初めまして！！
Ｒｅｖ　ｃｒａｚｙ　ｄｒｅａｍと言う者です♪

初めての投稿…大変疲れましたね。
ここに来て何もかも初めてで緊張して誤字脱字のオンパレードかも知れません…

でも小説大好きなので更新もがんばりますので！！
皆様に楽しんでいただけるような作品を作っていきたいです♪

でわ！！これからも宜しくお願いします（　・∀・）っ

Ｒｅｖ　ｃｒａｚｙ　ｄｒｅａｍでした！！

第1夜　ーファースト　コンタクトー

「そーいう事なんだよ。雅人。」

「ああ…。」

俺の名前は山本　雅人［やまもと　まさと］。１７歳。
…はっきりいってもう俺はこの人生に半ば飽き始めている。
何が楽しいわけでもない１７歳…高校二年生だから受験勉強もあるわけなく部活もやってない俺は毎日に落胆していた。

だから今もこうして暇だから、友人の手伝いをしているのだが…。

「で…なんで俺がこんな寒空の中天体観測の手伝いなんてしなきゃならないんだ？」

「ホラー研究会の人数が雅人も知ってるかぎり全然いなくてさー、ゴメンね。
…そうだ！！この映画［死霊の生焼けのハラワタ］の特別割引券あげるからさ！！
ゴメン！！ほんとあと一時間ぐらい手伝って！！」

さっきからゴメンと連続して言うのは

片瀬　孝太郎［かたせ　こうたろう］

実は俺の幼なじみなんだが、どうも気が弱いくせに現在人数不足の［ホラー研究会］の部長を勤めている。

俺はコイツと違ってホラー、オカルトのたぐいはだめなんだが…。

「んなのいらねーよ！！
だいたいなんだ！！
今の時代にこんな健全な若い少年が肌寒いなか怪しく男2人で月なんか見なきゃならんのか俺にはわかんねぇ！！」

「だからなんで月が満月のままで1ヶ月以上保たれてるのかその謎を僕は解き明かしたいんだよ！
最近ニュースや新聞に大きく取り上げられてるでしょ？
これは科学的上あり得ない類のない発見なんだってば！！」

「……」

「どしたの？雅人」

「…もう帰る」

そう言うと雅人は暗い表情で孝太郎にはもうついていけませんと訴えた。
きっとマンガで言えば多分額にその気持ちがハッキリと映っていたに違いない…。

孝太郎が何か言っていたが雅人にはもう聞こえない事にした。

二十分ぐらい自転車で走っていただろうか…。
いつもと変わらぬ満月が輝く。
金曜日の夜だというのに辺りに人は見えず薄暗い道路は月明かりによって映し出されていた。

「そういやほんとにこの満月っていつまで続くんだ？それにしても今日は一段ときれいだな…
（いかん、いかん。また孝太郎のペースにはまるところだった。）」
雅人はそう思いつつ気を戻して自転車のペダルを踏んだ。
あと、少しで家に着く…。

追いつめられてる…。
少女はそう悟った。
自分が追われる理由は分かっている…。
だが、今それを考える余裕などない。
「……ッ！！」
少女は自分の上肢をひねって飛んでくる攻撃をかわす…。だが次に着地した場所が悪く無様に転んでしまった。

今の攻撃によって腕に傷を負ったらしい。
傷は意外に深く少女の細い腕は痛々しく見える。

「もうだめ？お父様…」

諦めかける少女などお構いなしに確実にソイツらは迫ってくる。
実際何者かも知らぬ敵に少女は怯えた。

…来たっ！！

その何者かの一撃目をなんとかかわすと、怯む間もないまま二撃目が迫る。
少女は攻撃を避けきれずにマトモに体に受けた。

「…っきゃぁあぁぁぁぁ！！！」

少女は崖から落ち下にあった建物の屋根を突き抜け気絶した…。

「さって…帰るとしても何すっかな…。」

雅人には両親はいない。
雅人が小さい頃に交通事故で亡くなったそうだ。
だから雅人は1人でアパートに暮らしている。家に帰っても誰もいない…。

孝太郎は全てを知って雅人を自分の家に招き入れようとした。
だけど雅人はこれを断った。
寂しさ…それを雅人は理解出来ない。
それは強がりだと自分でも分かっていたが…

「…っと、なんで今更こんな事考えるんだよ…。」

自分のアパートが見えてくる…。
下り坂の下に見えるアパートはいつもながらボロい…。
多分大きな地震が来たらすぐさまその餌食となるだろう。

そう思い始めた頃それは確かに突然見え始めた…。

「……は？」

頭に思い浮かんだ疑問型の一言。
と言うかそれしか思いつかない…。

ーーーーー穴ーーーーーー

それは巨大な穴だった。アパートの屋根にボッカリと空いたそれは
…大きな大きな…穴だった…。

「あ～……。」

そして雅人は叫んだ。

かの［〇陽にほえろ］のように…。夜だから見えないはずの太陽に…。

「なんじゃこりゃー！！！」

その叫びは無情にも夜空へと消えていった…。

隕石！？が原因かと思われたアパートの屋根は見事に大破していた…。

恐る恐る二階にある雅人の部屋を開けてみる…。

意外にも部屋は綺麗なものだった。

確かに屋根の木片などは散らばっていたが、幸いにも一階の部屋までは貫通していないようだった。

「って…何が幸いだよ…最悪だっての…」

そこで雅人はある異変に気づく…そこにはありえないモノが存在した。

雅人はすすり泣きたい自分をこらえ目をちゃんと凝らして見る…。

そこには……

「…犬…だね。」

今まで起こった事を考えたらもうどうでもよかった…実際。

その犬はどうやらかなり傷を負っていた。
右腕（右前足）がかなり斬り裂かれている。

「なんで…こんな。」

雅人は基本的に動物は好きではない。
だけど性格上放っておく事は出来なかった…。

「とりあえず…と。」

雅人は棚の上から薬箱を取り出し傷薬と絆創膏を手に取った。

「人間の薬だから効くかわかんないけど…やらないよりはな…。」

適度に傷薬を塗り始めると子犬は軽いあえぎ声をあげた。
「ちょっと我慢な…。よし…終わり。」
雅人はため息を吐くと子犬はこっちを見ていた。

「とりあえず犬は好きじゃないけどな…。放っておけなかったから

さ。…って犬に言葉が通じる訳ないっての…。」

雅人は軽く子犬に微笑み笑った。

「さて…俺は寝るよ。じゃあお休みな…。」

天井に空いた大きな穴から漏れる夜空の光…。

そしてはっきりと見える満月。

これから起きる事も知らず満月はただ輝くだけだった…。

第2夜　ー転校生ー

朝が訪れる…。

とても気持ちの良い朝だ…。

それだけは当然のように万人に少なくとも与えられるものだと雅人は思っていた…。

［チュンチュン］

小鳥が朝を知らせる…。

なんて映画のワンシーンのような素晴らしい朝なんだろう…。

雅人はその雰囲気に浸る事にした。

そこでふと雅人はよく考えてみる…。

（鳥の声…きこえすぎてないか…！？）

しかもなんたってやたら鳴き声が響きまくる。というかかなりうるさい。

恐る恐る雅人は瞳を開けてみる事にした…。

［チュンチュンチュン］

状況を理解してみる…。そういえば昨日帰ってきたら屋根に大きな穴が空いてて…

この鳥の数はなんだ…

視界に見えるだけでゆうに３０匹はいます。

とりあえず雅人は現実逃避する事にしました…。

（夢だ…これは夢なんだ…。きっと目を覚ませばトーストが二枚焼かれてて暖かい紅茶が用意されてるんだ…。きっと…きっと…）

やっぱり限界でした…。

「あ〝〜！！！！！！！どこの世界に鳥が住みついてる部屋が存在するんだよ！！！！！」

その声が部屋中に響くと鳥たちは一斉に飛翔を始めるとともに一斉に部屋中にフンを撒き散らして天井の穴から逃げていった…。

そのフンは部屋中に蒔かれたとともに雅人の頭へと…。

「あ〝あああああああー！！！！！！」

言葉にならないとはきっとこういう状況なのでしょうね。

その瞬間雅人は気づいた…自分の愚考に…。

（まずい！！！！！このままでは…このままではヤツが…来る！！！）

そう思ったのも束の間…その瞬間はやって来たのです…。

ジャキン！！！！！

何か鋭い鋭利なものが部屋の畳から突き抜けてきた。

さ～てここで問題です。

ズバリ畳から突き抜けてきたものはなんでしょう？　1、空〇砲

2、ツインバスター　　ライ〇ル

3、日本刀

あ～…残念！！答えは3バンでした～。

「……はっ！！」

不思議な世界から意識の戻った雅人は部屋のドアがガンガンガンガンと激しく叩かれている事に気づいた。

［おんどりゃあ！！！早くここ開けんかい！！！！］

そう聞こえたような気がしたけどまた現実逃避するため布団へ籠も

る事にした…。
ガチャガチャとドアノブが回されていた。
トイレに逃げ込む事を考えたがもう遅かった…。

ガチャ…。とドアが開く音。
当然ですよね…。だって相手は管理人ですもの…。
そのうち雅人の視界にきらめく日本刀を持った人物が見えた。

チャキン……

静かに雅人へと向けられるそれは日本刀でしょうね。
きっとそうでしょう。

雅人はとりあえずあきらめる事にしました。
「スイマセンでし…ぎゃぼっ！！！！！…」
謝ったと同時に飛んできたのはそう…蹴りだったと思います…。

「で…いいわけは？」

そういって日本刀を私に向けるのは

山本　幸［やまもと　さち］　様…。

くしくも私の姉でありこのアパートの管理人でもあります。

私のこの顔の異常な腫れからも分かるように…幸様は元レディースのヘッドとしてチーム［派徒羅朱＝和訳…パトラ〇シュ］に数多くの伝説を作った英雄であります…。

黙っていればかなり美人だて思われますが…私の顔から見て判断して下さい…。

「なんか言った？」

今…心を読みとられました…ただ者じゃありません。

「はい。じゃあ今から十分…いいわけをする時間を与えます。どうしてアタシのアパートがこんなになってるかとことん説明してもらいましょうかね～雅人君？」

怖いです…私は最善を尽くして説明しました。

「結局犬がうちにやって来たせいでこうなって…げぼぁ！！！？」

「どうしてかわいいかわいい犬のせいなんかにしちゃうのかな～？だいたいこんな部屋に犬なんかいる？」

ふと…雅人の視界には犬の姿が見受けられませんでした…

必死に釈明しようとする私を幸様はアザケ笑うかのように…いや実

際笑ってました…。

「５０万」

幸様は私が痛みでもがいてる間にドンドン話を進めていきます…。

「屋根の修理費５０万。来月の家賃支払いの時までに払いな」

やっと意識がはっきりしてきた私に幸様は最後にこう言い残した…。

「よかったらアタシの部屋に泊まるか？」

信じらんないような言葉だった…。

「さ…幸様？本当ですか？」

「押し入れ。家賃月５万ね。」

訂正…鬼です。

ということで私はもうどうでもよくなったので学校に行くことにしました…。

大粒の涙が止まりませんでした…。

学校に遅刻して着いてみるとどうやら雅人のクラスの教室が騒がしい…。
教室に入ってみるとなにやら遅刻者そっちのけでクラスのみんなが何かに注目しているようだった…。
雅人はそんな事気にせず最短距離で席へと向かう…。

あまりにもウルサいのでしょうがなくみんなが注目する方向に目を向ける。

そこには1人の少女が立っていた。
なにやら自己紹介しているようだった。

転校生…それは出会いでいえばまさに人生のイベントである…。

そんなのどうでもいい…そう思っていた雅人だが…

カノジョを魅てしまった…。

銀色に輝く瞳…それは何よりも深く何かを訴えるような美しさであった…。

「え～と…カノジョの名前は　エリツィン　ウルスフィード　杏樹と言います」

クラスの担任がながながとした説明をしているが、クラス中の視線はその転校生一色であった…。

「え～とエリツィン　ウルスフィード　杏樹さんはイタリア人の父親と日本人の母親のハーフであり…え～とまだ紹介が終わってないよ？エリツィン…」

「杏樹でいいです！！！先生！」

転校生はそれだけ言い残し担任用の壇上から降りた。
どこかに向かって歩いているようだった…。
真っすぐ真っすぐ後ろの席…
雅人の席へと向かって…。

（…って俺！？！？）

わけが分からなかった…クラス中にどよめきが走る。そして雅人の席の前で止まった…。

「な…何？」

思わずこぼれてしまった疑問。
カノジョは心地よく答えてくれた。

「山本　雅人君…ですよね…？」

さらに響きわたるクラスのどよめき…

「あの…昨日はどうもありがとうございます…。」

クラスのどよめきがやがて悲鳴へと変わった…特に男子の。

「あの…！！よかったら今日一緒に帰りませんか！？」

の分からない１７歳の夏…物語は微妙に困った展開で突然始まろうとしていた…。

第2夜　ー転校生ー（後書き）

いや～、お気づきの方もおらっしゃると思われますが…

小説タイトル変えちゃいましたょ（，ー、）

なんか書いといてちょっと気に入らなかったもんですから←←

皆様にはほんと色々迷惑かけちゃいますが…

どうかこれからもょろしくね！？？

第3夜　lbefore　or　afterl

あれから学校が終わり雅人はいつも通り帰ろうとする…。
いつもなら何も問題無く帰れたのだが…

今日は確実に何か違った…。

第一にクラスの注目する目線が違う…。第二にその視線は俺に向けられている。

おかしい…何かあったのか？
だが雅人はその異変にすぐに気付く。

「じゃあ…帰ろっか？雅人君…。」

「あ、あぁ…（かなりぎこちなく）」

雅人の側に突然立ったのは謎の転校生…

［エリツィン　ウルスフィード　杏樹］

どうやらカノジョはハーフのようで日本人の女の子とは異様に違う雰囲気を放っている。
銀色に輝く瞳…。
淡く濡れたように光る栗色の肩ぐらいまで伸びた髪…。

はっきり言おう…。

（かっ…かわいい…。）

……っと！！！！！危ない。危ない。あまりの桃源郷に雅人は自慢の顔を歪めまくっていた…。

（落ち着け…！！落ち着くんだ！

山本　雅人！！１７歳！！　なんでこんなかわいい転校生がいきなり！！！よりによって！！俺のとこなんかに！！？考えろ…考えろ！……そうか！！金か！？金なのか！？金と名誉目当てなら残念だったな！！！

俺の財布は朝からうちの身内の鬼によって一銭すら残ってないぞ！？挙げ句の果てに１０円ガムの当たり券まで取られたぜ！！！

ははっ！！はははは…はは…）

虚しくなったので何故このような事になったのか…

突然の展開に混乱している読者のためにも雅人は思い出す事にした…。

クラスのどよめきがやがて悲鳴へと変わった…特に男子の。

「あの…！！よかったら今日一緒に帰りませんか！？」

そうカノジョが言ってきたのは覚えてる…。
クラス中がざわめきで満ち溢れる。男子は…

「まっ…雅人さんのとこ行っちゃったぜ！？どうする？」

「どうするも何も無理だって！！」

「おっ、俺は行くぜ！！杏樹ちゃんのとこに！！」

「止めとけ！！みすみす死ぬ気か！？親から貰った命は大事にしろっ！！」

「そうだ！！雅人さんがなんて呼ばれてるか忘れたのか！？」

「くそ！！覚えてるよ！！！狂人！　核兵器！　地上最強の…なんだっけ！？」

「噂によれば族のチームの頭を一撃で倒して…やばいな」

「噂によれば前科持ちですでにその拳は人を殺めてるらしい…」

「噂によれば姉貴はもっとヤバくて常に日本刀を振り回してるらしいぞ！？」

「くそ…杏樹ちゃん、萌えるぜ…」

などと噂が先走った状態である。まぁ…確かに姉貴に関しては真実だが…。
そして最後に聞こえたセリフは無かった事にしておこう…。

一方…女子は…

「なんでいきなり雅人さんのとこなんかに!?あの転校生許せない!!」

「しめちゃう!?あの転校生しめちゃう!?」

「あの…雅人さんの顔…き〜!!転校生!!殺っ!!いつか必ず!!」

「雅人さん…カッコいい…」

「雅人君…それに…杏樹ちゃん…いい…」

といった感じである…。

お前ら全部聞こえてるっての…。例の通り最後の女子のセリフとしてヤバいと思ったセリフは聞かなかった事にしておこう…。

やっと静かになったと思われたら…

今度は何か様子が違うようだった…。

クラス中の皆の視線が雅人へと集まっている事に気付く…。

まぁクラスのやつがどうなろうと知った事ではない…。

「え〜と…杏樹さんだっけ?えと…悪い…ちょっと俺には…。」

理性を振り絞って言った雅人の一言はクラス中へと感動をもたらした。

『マンセー（万歳）！！！！』

たった今クラスの気持ちは一つとなった…。

（これで…これでよかったんだよな？どうせ俺には無理な事だから、だから……う゛っ！！！！！）

恐る恐る目の前に立つカノジョの瞳を見てみる…。そこには…一筋の涙が…今にも落ちそうでいる…。

「…一緒に帰ろうか！！！！」

「本当！！？雅人君？ありがとう！！！」

ああ…そうさ。所詮俺はこんな男さ…。　だってしょうがないさ…。涙は女の武器だもの…。

クラス中が今悲しみに満ちようとどうでもいいさ…。

と言うわけで今に至るわけでございます…。

通学路に指定されている河川敷を歩く2人…。

どうやら2人は家に帰る方向が同じらしい。

これぞまさに運命の出会いなりっ！！！
…ってそんな事はどうでもいい！！

雅人は勇気を振り絞って聞いてみる…。

「あの…エリツィン…。」

「あっ、杏樹でいいですよ！！出来れば杏樹って呼んで下さい！！」

思ったより積極的なカノジョ…杏樹に多少圧倒されながら、雅人は一番気になっている事を聞いてみる…。

「じゃあさ…杏樹…さん。こんな事いきなり聞くのは失礼だと思うけど…なんでいきなり俺なんかと一緒に帰ろうかと思ったの？」

すると杏樹は一瞬悲しそうな目をしてこうつぶやいた…。

「やっぱり…覚えてないですよね…。」杏樹の瞳が悲しみに落ちるのが分かる…。

ふと…杏樹の右腕におかしなものが付いていることに気付いた。

よく目を凝らしてようやくわかったソレは…

小さな絆創膏だった…。

何かが頭に引っかかる…。とても…とても大事な事に答えられない…。

頭が…痛くなる…。

その全ての疑問に答えるかのように…杏樹が答える…。

「あのね…雅人君…。私ね…。」

［プルルルル！！、プルルルル！！］

突然鳴り響くその音は雅人が姉貴の魔の手を逃れて最近ようやく買うことの出来た携帯電話の着信音だった。

「ごっ、ごめん！！！ちょっと電話出るね！！」

杏樹は言葉に出さずに軽くうなずくだけだった…。

［あ～雅人！！今すぐ家に戻って来いよ～！！］

鬼の姉貴からだった…。また金の請求か…。

「もしもーし…もしもーし。」

［プー、プー、プー、］

そうでしたね…幸様…あなたはいつもそう…
マイペースのかぎりを尽くしていつも私の邪魔をなさるのですね…

「ごめんっ！！！ちょっと用事が出来て急いで家に戻らなきゃいけなくなって！悪い！！じゃあまた明日！！」

急ぎの用だったから仕方ない…。そう言って雅人は自分自身を納得させる。

「あっ…」

そんな雅人の姿を杏樹はただ見つめるだけだった…。

「今日、屋根修理の業者呼んだらさこのアパート自体直さなきゃいけないんだって！！だからリフォーム代はお前持ちね！！」

そう幸様は言われました…。

どう考えても道理が合いません…。

鬼ですか！？アナタは…。

本当に実の姉ですか…！？

私はただそれだけのためにここに急いで来たのでしょうか…？

私はもう…泣き寝入りするしか無かったのです…。

ただ姉の部屋の押し入れで泣くしか…。

いつも通り気だるく学校に行く…。

途中で孝太郎に会って杏樹の事を問いつめられたが、答える気力もなかったから無視した…。

教室に入るとなぜか杏樹の姿がなかった…。

クラスの皆も男子を中心にかなり動揺している。
当然男子達は昨日一緒に帰った雅人に疑いの目を向けている…。
当然何も知らない雅人はそんな男子達に苛立ちを覚えた。

（なんで昨日から姉貴といい…こんなにイライラさせるんだよっ！！！何も知らないっての！！！）

雅人の鋭い眼光が男子達を襲う。
捕食されると思った男子達は即座に視線をずらした。

今日の1日は無気力のまま終わった…。

何となく昨日の事を考え直してみたくて今日は歩いて帰る事にした…。

辺りはすでに日が落ち暗くなっていた…。

しかし…昨日杏樹はあんなに元気だったのに、まさか俺が途中で帰ってしまったからって怒ってしまったのか！？

もしくは…あれから何かあったとしか…。

「まぁ大丈夫だろっ！！俺が考えても仕方ない事だし！！！」

そう安易に考えてるうちにアパートに着いていた。

まだなんとなく実感のわかないその大きな穴はどう考えても、現実離れしている…。

さっさと例の押し入れに入って寝よう…そう思った矢先、雅人は大事な事を思い出した。

「っと…授業道具は俺の部屋だったな…。」

なにかとA型はこんな時でも几帳面すぎて困る…そう雅人は思った。

限界の前に着き鍵を開けようとする。

「そういやあの犬って…どうやって抜け出したんだろ？

しかもあの怪我で…

まさか…天井の穴…って事はないよな！？もしかしたらまだ部屋にいたり！？」

そんな有り得ない想像をした後さっさと部屋へと入る…。

そこには……。

あの犬がいた…。

「…ありえね～…」

近くに寄ってみるとまさにあの犬だった…。
右腕に絆創膏…。
しかもあろうことかまた全身に傷を負っている…。
「おいおい…全く何してんだよ…？」
半ば呆れながらも雅人は再び傷薬を用意しようとする…。
その時だった…。
「キャン！！…キャワン！！！！」
犬がもの凄い苦しみ始めてるように見えた…。
ヤバい…雅人はそう思い犬を放っておけず迷わず電話帳から地元の動物病院の番号を調べ始めた。
「頑張れ！！待ってろよ！？犬っころ！！」
その思いと裏腹に犬はかなり苦しみだしている…。
「くそっ！！これじゃない…これでも…！！落ち着け！！！」
そして…
犬の動きが止まった…。
「おい…犬…くそっ…くそっ…」

犬はもう動くことはなかった…

「くそ…」

自分の全くの無力さにどうしようもない悔しさがこみ上げる…。

その時だった…

突然犬がビクンッと跳ね上がる…。

「え…。」

それだけじゃなかった…

確実に目の前で有り得ない事が起きている…。

犬の体がドンドン長くなっていき…その体毛は徐々に薄くなっていき…

犬は月夜の光に照らされながらその姿を示し始めた…。

それは人間の体のように…いや…それはまさに人間だった…。

そして…それは…雅人には見覚えがあった…。

「…杏樹…。」

栗色に輝く髪…。

そして右腕に張られた絆創膏…。

犬…いや、杏樹は目を覚ます…。

「……」

ふと…目が合った…。

「……こんばんはっ！！！すみません！！！！」

第一声がそれだった…。

満月は何も語らない…。

だけど…物語は確実に時を刻む…。

第3夜　ｌｂｅｆｏｒｅ　ｏｒ　ａｆｔｅｒｌ（後書き）

結構力を入れたのがこの話です！！
おかげで結構疲れましたね！！
多分結構誤字などがあると思うので…

ど～かこの愚か者に指摘をお願いしましょ～（Θ＿Θ）

第４夜　ー過去ー

およそ日本とは遠く離れた国…。
そこにある少女がいた…。

［お父様〜！！こっち！こっち！］

そう言って一面の花畑を走る少女…。

杏樹。

誇り高きウルスフィード家が誇る子である…。

そして…少女は

［禁忌の子］

［待ってくれ！！杏樹！］

そう言って少女の後を追いかけるのは
誇り高きウルスフィード家現当主

［ベレヌ　ウルスフィード　エルン］
代々受け継がれてきたウルスフィード家率いる［狼人族］を束ねてきた王でもある。

［きゃっ！！！］

勢い余って石に足をつまずき今にも転びそうになった少女にエルンは手を伸ばした…。

満面の笑みで手をつかんで笑ってくれる少女をエルンは見つめた。

［杏樹…杏樹は私がずっと守るよ…］

三年前…

［あの子は…生かしていけはいけない！！］

［あの子は禁忌の子だ！！］

［呪われし刻印を持つ子…今すぐ処分を！！］

ガンッッ！！！！

その場にいる皆の視線がその音の先に注目する…。

［あの子は…杏樹は貴様等がなんと言おうと！！
私の子だっ！！！］

ザワザワと周りが落胆やあせりから声を出している。

［ですが…王…。このままでは我が国の存亡が！！］

再びテーブルを叩く音…。

［わかっている…。わかっているが…まだ生まれて間もない子供を
…どうしろと…言うのだ…］

エルンは歯ぎしりしその口元からは血がにじんでいる。

ガタンッ！！

突然皆が集まる部屋の入り口から音がした。

足早に闇へと消える影…。

エルンは迷わず駆け出しその影の後を追った。

そこは城の屋外…。夜空にまんべんなく満月が広がっている。

［全部聞こえてたよ？…お父様］

その言葉がエルンの胸へと深く刺さる。

［杏樹…］

エルンは少女のそばへと近寄り座った。

［大丈夫だよ…杏樹は私が守るから］

ふと少女の首に目をやる。

そこには呪われし刻印が刻まれていた。

その刻印を持つ者は世界を滅ぼすと言われている…。

遅かれ早かれその時は来るとは分かっていた。

だが…いや、理由は分かっている。

（すまない…杏樹…）

それは私の犯した罪なのだから…。

（あれから三年…か。）

エルンは思い出したように過去を振り返った。

（このまま…こんな日々であればいいのだが…）

エルンは少女と共に城へと向かう。

これから起こる事も知らず…。

［とうとう運命の日ですな？王エルンよ］

［ほんとにこれでよかったのかね？］

［やつら…下等な吸血鬼の連中は近々行動するでしょうな］

様々な非難の声が王エルンに注がれる。

たしかに非難を浴びる事は分かっていた。

だがいつも王として…それ以前に１人の子の父親として正しい事はしたと思っている…。

だから…

［皆の者…よく聞いてくれ…私は皆が知っている通り我が娘…杏樹のため、これまで多くの同志、家族を失ってきた…。皆には迷惑をかけている…。
だが…私はー］

言葉はそこで途切れた…。
突然城全体に轟音が響き渡る。
次の瞬間…丈夫な外壁は一瞬にして崩れ大きな穴が開いた。
そしてその穴は一斉に蠢く　ソレ　によって埋められる。

コウモリ…ばかデカいコウモリだった。
ソレは悲鳴に似た声を発すると一瞬にして近くにいた狼人族の男のそばへと降り立った。
そして次の瞬間…

ザシュ…

巨大なコウモリ男は首もとへ噛みつき体中の体液、血液を残らず吸い取りあげる。狼人族の男は自分がやられた事にも気付かずただ呆

然と立っていた…。
周りもである。

［やはり…雑魚の血はマズいな…］

その一言は周りを混乱に陥れるには十分なものだった。
辺りは騒然と化した…。

［ふぁぁぁ～。眠たい］

少女…杏樹は目を覚ます。
なにやら杏樹はいつもと様子が違う事に気がついた。
だいたいこの位の時間であれば誰かが起こしに来てくれるはずなのだが…
何やら今日は城中が騒がしく思える。
とりあえず杏樹は散策してみる事にした。

どうやらこの大広間から音が響いているらしい。

（何かあったのかな？……そうだ！！今日はお父様の誕生日だった！！私ったらすっかり忘れちゃって。じゃあみんなパーティーの準備をしてるんだ！！

そうと決まれば何か私も手伝わなきゃ！！）

杏樹の本能は告げていた…。

（開けてはいけない…）

杏樹はそれでも扉を開ける…。

ガチャン…。

そこには騒然とした光景が広がっていた…。

逃げ惑う仲間たち

逃げ遅れ捕食される仲間たち

ただ悲鳴をあげる仲間たち

必死に抵抗する仲間たち

そして…捕食するヴァンパイアたち

一匹のヴァンパイアがこちらの存在に気付いた…

［あん…！？あ～ん！？

あれ～！？

姫様じゃ～ん？］

あくまでそのヴァンパイアの口調は楽しげだった。

まさにその血走った目は自然界の捕食者…そのもののようだった。

［あ～！！俺良いこと考えちゃった～！！俺が姫様の禁忌の血を吸えばかな～りナイスじゃないか～？］

狂っている…杏樹はただそう感じた。

（えっ…やっ！！！

逃げなきゃ…！！どこに！？逃げ場なんて！？）

混乱する杏樹にかまわず一匹のヴァンパイアは目標を一点に絞り突撃してくる…その姿はまさに弾丸のようであった。

［お姫様～。

い～た～だ～き～ま～ジュッッ！！！！］

突然ヴァンパイアの奇声は鳴り止む。

その異変に杏樹は後ろを振り向いた。

そこには…

［お父様っ！！！］

そこには王エルンが立っていた。

エルンはヴァンパイアに向かい城の支柱を投げつけたのだった。
ヴァンパイアは無惨にも支柱に潰されながらグゥと声を漏らしている。

どうやら今の一撃では倒せなかったらしい…。

［大丈夫かっ！！杏樹！！！］

そう言うエルンの体こそ全身が傷やら痣だらけで見るもたえない状態だった…。
そしてその姿は既に体長が2メートル以上はゆうには越えるかというくらいの巨体で黒い体毛に覆われた状態になっている。

すなわち…。

獣人化…。

まさにその姿形は西洋の狼男を模していた。

［杏樹っ…よかった…無事だったか］

［お父様！！一体…どうなって…］

無理もないだろう…年端もいかぬ者がいきなりこんな状況を見せられても頭で理解出来るはずがない…。

［杏樹…こっちに！！］

エルンは半ば無理やり状況を理解しきれていない杏樹の腕を掴み奥の鉄の扉へと向かった。
その時一斉に周りにいたヴァンパイア達は視線を杏樹へと向ける…。

［姫だっ！！！］

［俺によこせ！！］

［あの血はっ！！］

様々な声が呪詛のように木霊する。

［いっ…いゃ…］

杏樹は言葉にならない悲鳴をあげる。
そしてヴァンパイア達は一斉に襲いかかるっ！！

［走るぞっ！！！杏樹！！］

エルンの言葉に杏樹は正気を取り戻し、２人は思い切り扉に向かって走った。

［シャァァァアッッ！！］

杏樹達を覆う黒い固まり達。
幾つもの牙が2人へと剥き出しの殺意を露わにする…。

間一髪…ほんの一瞬扉を開けるのが遅かったら…もはやその体は骨身となっていただろう。

だが安心は出来なかった…。
その扉は鉄製とはいえ今にも破壊されそうだった。

がんがんと響く破壊音…爪をこすりつける嫌な音。
そしてヴァンパイア達の獲物に対する荒々しい吐息がかけられている。

そう…この部屋には逃げ場がなかった…。
密閉された空間…それが杏樹には自らの棺に思えた…。
狩るものと狩られるもの…それはいやなほどハッキリとしていた。

父エルンを杏樹は見つめる…。

その体毛で覆われた体は徐々に小さくなりやがて本来の父の姿に戻る。

［お父様っ…］

杏樹はこらえていた恐怖心をとうとう抑えきれなかった。

愛する父の胸へと顔を埋めた…

［すまない…杏樹］

父は一言そう言った…。

あれから何時間たったのだろう…。未だ扉の向こうでは惨劇が繰り広げられている事だろう…

ふと杏樹はある事に気がつく。

背の大きな父の姿でいままで分からなかったが大きな棚がいくつもある。

ここは城で唯一立ち入り禁止の烙印が押されていた父の書斎である事が分かった…。

どの本を取っても何を書いてるのかサッパリ分からない。

父はある本を手にとりながら言った。

［杏樹…私は…長年君のその刻印について研究してきた…］

刻印…そうその意味は杏樹自身わかっていた…

一族の中でこんな伝説話を聞かされた事がある…

（その刻印持たれしもの…世界を滅ぼす力持たれり…）

［私の研究によれば伝説には続きが存在するんだ…］

そう言うと父は淡々と語り始める…

［されど光あらざれば刻印、相反し光とともに照らすだろう…］

光…杏樹にはそれが一体なんのことかサッパリ分からない。

その時…扉からとてつもない音がした。

ガンガンッッ！！！ガチャガチャン！！

よく見れば扉が歪み隙間が出来ている…
そこには…

［きゃあぁああ！！］

ヴァンパイア達は血走った眼で見つめながら異常な力で扉をこじ開けようとしていた。

［おとうさっ…！！！？］

エルンはいきなり杏樹をドンと押してその場につき倒した…

［えっ…お父様…？］

［Ｅｌｒｉｓ…ｖａｌｌｅｌ　ｇａｌｐｒｅｔｔａ…］

エルンは聞き覚えのない言葉を発している。

［杏樹…私はようやく分かったんだよ…光がなんたるかを］

エルンの口調はとても優しいものだった。
杏樹はその言葉の意味をようやく理解してきた…

［杏樹なら大丈夫だよ…強い子だから。困った時はいつも私がそばにいるから…］

ポゥ…っと優しい光が杏樹の体の周りを包み込む…。
それは光ではなく魔法陣のようだった。

［やだよ…そんなのやだよ！！お父様！！］

エルンはあくまで優しい顔つきのままその言葉を口ずさむ。

［ｓａｍｅｔｙｖａｎｉ…ｌｅｓ…］

その言葉は狼人族に古くから伝わる呪文だった。
それを意味するものは…
すなわち…［転送］を意味していた。

［お父様！！！お父様！！！］

杏樹の叫びはすでに届いていなかった…

見ると鋼鉄のドアが徐々に引き裂かれているのが見えた。

杏樹を包み込む魔法陣が徐々にに明るくなっていく…。

［やだよっ！！！そんなのっ！！］

杏樹はもはや泣いていた…。

［お父様！！お父様！！］

よく見るとエルンは何が言っている…

杏樹はかまわず叫び続けた…

［お父様！！やだよっ！！おとうさっ…］

［杏樹…光はきっと…君を照らし続けるから］

［…お父様…］

そして…次にはもう杏樹の姿は消えていた…。

同時にエルンへと言葉がかけられる。

［よぉ。王様。…別れは終わったかい？］

残酷にも吐き捨てられる言葉…

エルンは無言でいる。

［惜しかったなぁ～あの姫様の血を飲めなかったのは！！まぁ…いいや。アンタで我慢しとくよ］

ビキビキと音を立ててヴァンパイアの牙は伸びていく…

［じゃあ…いただきまっ…］

ヴァンパイアの顔面に大きな手が覆われる。

次の瞬間…エルンであった［狼人］はヴァンパイアを凄い力で床へ

と叩きつけた。

［貴様等…覚悟は出来てるだろうな…］

気がつけばヴァンパイア達の前には恐ろしい大きさの怪物が立ちはだかっていた…。

刹那…轟く野獣の叫び…

それは悲しくも美しく響く…。

満月は美しく輝きちらす…

それはまるで生命の終わりのように…

第４夜　ー過去ー　（後書き）

大変更新が遅くなって申し訳ありません（＜＿＞）！！

毎回皆様には迷惑かけておりますね…（泣）

で…今回の話は杏樹の過去話ってわけですが…がんばって書きましたょ～（Ｔ＿Ｔ）

出来れば感想よろしくお願いします！！！

どーもＲｅｖ　ｃｒａｚｙ　ｄｒｅａｍでした～（＊＾－＾）ｂ

第5夜　ー余りにも衝撃的な1日ー

「…う～ん…あっ…」

気がつけば朝になっていた…とても清々しい。
だが何か忘れてる気がする…杏樹はそう思い周りを見渡してみる…

そこで……

「おはよ…」

突然誰かに声をかけられた…
誰！？そう思い声の主を見てみる…

「あ……オハヨウゴザイマス……」

完璧に声が裏返ってしまった…
無理もなかった…だってそこには…

「ん～……」

雅人は今までの人生でこの上なく悩んでいた…
雅人の目の前にあるのは冷蔵庫。
『家に来ている女性に対してどんな料理を出せばいいか』
それが今雅人を窮地に追いやっている課題である…

（…っおい！！！そこで今バカか！？たかがそんな事で悩んでんのか！？って心の中で思ったやつ！！悪かったな！！…どうせ家庭科はいつも評定1だよ！！
どんな料理も俺の手にかかれば一瞬にして化け物になっちまうぜ！！
砂糖と塩を間違う！？
甘すぎるぜ！！
納豆に大根おろしを入れればうまいと孝太郎に言われて、入れようと思ったら大根が無くて…代わりに砂糖を納豆に載せて孝太郎に食わしたら泡吹いちゃったぜ！！危うく前科持ちになるところだった！！！）

「…はっ！！」

雅人は現実に戻ると居間に座っている杏樹へと意見を求める…

「なんか食べたいものってある？」

「な…なんでもいいです！！」

０．０２５秒…即答である。

再び冷蔵庫を開けてみる…そこには…

「なっ…なにもねぇ…」

１人（あの例外の鬼神を除いて）暮らしとはこうも悲しいものなのか…

［ピィ～ンポ～ン］

突然玄関に響く下品な音を鳴らすチャイム。雅人は急いで玄関へと向かう…

そこには一升瓶といつも通り日本刀…そしてなぜかキャベツ（？）を　片手に泥酔している幸様がおられました…

幸様…日本ではそれを銃刀法違反というのですよ？

私は優しく言いました…

ん…キャベツ…？

私は幸様を丁重にお部屋へと送ってやるとそのキャベツを手に取り

（グッジョブ！！）

と軽く言い残し脱兎のごとくその場から逃げ去りました。

ドンッ！！！

その大皿に置かれたのはまさにキャベツだった…

そして…とうの雅人は土下座の姿勢で固定している。

「これが今の俺の精一杯の努力です…」

雅人は下手に自分の調理の毒牙にかけるより新鮮さ溢れるままの原型で出すことにした。

バァリボォリ…

不思議な効果音が聞こえてきた…

ふと顔を上げる雅人

そこにはキャベツを食べる…いや貪る杏樹の姿があった…。

「あっ、おいしいれすょ？おいしいれす！！」

容赦なく食らっている…だが…その姿は何というか…可愛かった…

「雅人君、料理うまいれすね！！」

バァリボォリ…

（いや…キャベツそのまま出しただけなんだけど…）

あくまでキャベツをほっぺいっぱいに頬張りながら自然に下から斜め４５。の角度でこちらを見ている杏樹…

確実に雅人の男心は揺さぶられていた…

雅人は一時台所へ非難して気を落ち着かせる事にした。

「あ〝ーっ！！！」

気持ちを落ち着かせ再び居間に戻る雅人…その姿を杏樹はキョトンとした顔で見つめていた。

「ど…どうしたんですか…！？」

雅人はあくまで自分的にベストな爽やかな顔で返事を返す…。

「さぁ…学校に行こうか…」

「は…はい…」

その雅人の顔立ちはなんとも……杏樹の反応などからアナタのご想像力にお任せいたします…

部屋から出て鍵を掛けると大きな音がしました…
魔王…前言撤回…幸様でいらっしゃいます…
幸様はなんと自分の部屋の扉を蹴やぶって飛び出してきました…
「てめぇ…死ぬ前に何か言いたい事はあるか…」
何やら日本刀を片手にすご〜く怒っていらっしゃいました…
「あれほどこのアパートでは大きい声出すなって前々から何億回言った事やら…お前…ソロソロ死ぬ覚悟は出来て――ん…！？」
幸様はやはり先ほど私が声をあげたのを見逃さなかったようでした…
まるでデ〇ルイヤーです…。
そこで幸様を筆頭に私、杏樹はお互いに気づき合いました。
『あ……』
しばらくの沈黙のあと、第一声をあげたのは幸様でした…。
「あ〜そういう事ね？雅人君…！？分かったよ？君は家賃を滞納するだけでなく…家に勝手に女の子を連れ込んで挙げ句の果てに未成年のクセにＲ－１８指定の事を平気でやろうと考えてるってわけかぁ〜！？」

幸様はとても危険で清々しい笑顔をしていらっしゃいました…。
私は一目で危険だと思い杏樹に逃げるよう訴えました。
「あ…杏樹！！危険すぎる！！先に学校に行って雅人君は最後まで頑張って必死に生きてきたってみんなに伝えてくれ！！！！頼ゴキャぶしゃ～っ！！」
必死な思いは伝わる事無く雅人の体は3メートル以上殴り飛ばされた…。
杏樹は幸へと一礼したあと、死に損ないの塊を拾い集め学校へと向かうのであった…。

学校に着いたら着いたで皆の視線が痛かった…
何せ転校してばかりの謎の美少女…杏樹と通学を共にしたからである…
「雅人さん…なんであんな小娘なんかと…」
「もうかなり進んでるよ？あの二人…」
「き～悔しい！！」

勿論雅人の耳には全て聞こえてます…

（あ～もう勝手にしろよっ！！）

雅人は心の中で呟きました。

（何があったも何も…）

雅人は杏樹の方を見つめた…

（あんな事…杏樹になんて聞けばいいんだよ…）

昨晩の出来事を振り返る…全てが常識を越える事ばかりだった…

満月の光を浴びた犬が突然杏樹に…

「あ～！！もう訳わかんねぇよ！！」

そう叫ぶ雅人にクラス中の視線がロックオンする…

その場に居づらくなった雅人は屋上へと避難する事にした…

「あ～あ…何やってんだろ！！！俺…」

屋上で1人大の字になって寝転ぶ雅人

そこに足音が近づいてきた…

そこに来たのは杏樹でも…孝太郎でもなく…汗でダラダラになった1人の体格の大きい男が立っていた。

「山本…ちょっと立てよ…」

（たしか…コイツは…入学してきた頃…いきなりケンカをふっかけてきた三年の空手部のやつだったか…）

なんか…大体予想が出来た…
このての輩はたいがい…

「お前の顔が気に入らない」

「態度がムカつく」

などと言ってわざわざケンカをふっかけてくるタイプの人間だろう…

「何だよ…」

雅人はいつでも対応出来るよう立ち上がる…。

だが…

「山本……お前杏樹ちゃんの携帯のアドレス知ってるだろ…？」

……は？

「なぁ！！知ってるなら教えてくれよ！！減るもんじゃあるまいし！！あと…お前杏樹ちゃんに手を出してないだろうな…？もしもの事があったら――」

大の男が情けなく雅人にしがみついてくる…そこにはまるで先輩の威厳は存在しなかった。

ブチ…。

そこで雅人の血管は破裂した…

「ったく…てめぇはアドレス教えてもらうかぶっ飛ばすのかハッキリしやがれっ！！」

雅人はそう言い終える前に殺人コンボを全てヒットさせていた…

←↓＋Ｂみたいな感じで…

う～わっ！！…
う～わっ！！…
う～わっ！！…

屋上にはその敗者を表す懐かしい声だけが轟いた…

「帰る…」

雅人はホームルームの時間、皆の前で言った。
皆驚いた顔で一斉に視線を向ける…

（だから…その視線がいやなんだよ…）

雅人は半ば泣きそうな気持ちで帰る準備をしている。
クラスの担任ですら雅人を止める事は出来なかった…
うっかり止めようものならば蹴りの一発ぐらいは覚悟しなきゃいけないのだから止めないほうが賢明とわかっていたからだ…

「先生！！…あの私も早退します！！」

そう言ったのは杏樹だった…

帰路へと向かう雅人の寂しげな背中を杏樹は追いかけた…

この後…ホームルームでは雅人と杏樹についての緊急会議を開いたのは言うまでもない…。

「雅人君！！」

街中を歩いてるときだった…

杏樹に声を掛けられたのは…

「ど…どうしたの！？急に帰っちゃうなんて！！」

ハァハァと息を切らしながら杏樹はそう言った。かなりの距離を走って来たのだから無理もない。

「別に…」

雅人はそっけなく答える…

プルルルル…

携帯の着信音が鳴りだす。

誰の番号かは一瞬で判断できた…

「もしもし…」

［あっ、雅人！！僕だけど！！］

電話の主は孝太郎だった…

「お前かよ…孝太郎…んでなんの用！？」

今の雅人の怒りは絶頂期に達していたが孝太郎はと言えばいつものテンションのようだった…

［ごめんっ！！用ってわけでもないけどさぁ…あの杏樹って子いたじゃん？うちのクラスでその子のアドレス知りたがってるやつがい

てさぁ。雅人なら仲いいから知ってたら教えてちょ――」

バキャ！！……

次の瞬間に雅人は携帯を粉々に握りつぶしてた…
バラバラになった携帯の破片によって雅人の手からは血が止めどなく落ちていた…

「あの…雅人君…」

雅人は無言で杏樹を見つめる…
その顔は何かふっきれている感じにも見えた。

「今の…友達？…きっと心配してるんだよ！！ほらっ！！学校戻ろうよ！！」そんな雅人を元気付けようと話しかける…

そんな杏樹に雅人は…

「……ふざけんなよ…」

「えっ…」

「ふざけんなっつってんだよっ！！あんたが来てから俺の生活はボロボロになってきてんだよ！！わかんねぇのかよ！！」

もう…雅人は己を止める事が出来なかった…

「あんたが来てから…俺の全てが変になっちまうんだよ！！　みんなあんたのせいなんだよ！！いい加減俺に関わるのは――」

そこで雅人の言葉は途切れる…。

止めたのは…杏樹だった…。

杏樹の瞳には一筋の涙が見える…

「あのっ…！！ごめんなさい！！あたし…そんな事全然わかんなくて…その…ごめんなさい！！」

杏樹は手で顔を押さえながらその場から離れていった…。

「…あ…」

……ごめん……

それだけ…それだけを伝えればいいだけなのに…

雅人は言えなかった…

雅人は自分への怒りからかますます苛立ちが募りその場にあった自販機を蹴り上げた…

「くっそ…わけわかんねぇよ…」

どうしようもなくなった雅人はとりあえず帰路へと着くことにした…

「ひゃひゃひゃ！！」

その時どこからか…下品な笑い声がした。

コンビニの前で見た目が不良な感じの奴らが2人たむろをしている…

「ち～わ～げ～ん～か～♪あひゃひゃ」

不良の一人…金髪で耳にピアスを大量している男がそう言った。

「へへへへ…見してくれるじゃんかぁ…」

続いてもう一人の不良、茶髪に眉の殆どないやつがそう言った…

（また変な輩かよ…もう関わりたくないっつの…）

しかし怒りが頂点に達していたせいか、雅人はソイツ等を睨め返した…

この街で名が知れてる雅人だと分かっている者であればすぐに視線をそらしたくなるだろう…

だが…不良達は下品な笑いを止めようとはしなかった…

「ハハハハ」

「あひゃひゃ」

その全てが脳へと絡みつく…

「おい…お前ら…」

雅人の我慢の限界が訪れる…

「ひゃ？…」

金髪の男はあくまで笑っていた。

「ちょっとこっち来いよ…」

路地裏には下品な笑い声が響いていた…

「んで？ど～する気ですかぁ？」

男達はどうあっても馬鹿にしたいらしい…

「分かってんだろ…来いよ…」

2対1…まったく雅人にとって問題な事はない。

しかし今回だけは違った…
路地に入った瞬間気づいた変化…雅人はそれを見逃さなかった…

ソイツ等から放たれる獣臭…
まるで人間ではなかった…

雅人は徐々に構えていく…

だが…その一瞬で戦いは始まっていた…

「じゃ～あ遠慮なく～♪」

そう言った金髪の男は一瞬にして姿が消えた…

雅人の背後に悪寒が走る…
背後から突きつけられる狂気…そして迫り来る恐怖。

雅人が気づくには遅すぎた…

ザシュ…

「な…！？」

雅人はようやく自分の身に起こっている事を黙認した…

（コイツ…首に噛みついて…っ！！）

それは不思議と痛くはなかった…だが恐怖と快感の両方が雅人へと襲いかかる…

「…っざけんなっての…！！」

雅人は振り向きざまに全力を込めてソイツへと右フックをお見舞いした。

倒れたソイツはやはりさっきの金髪男だった…。

「なんなんだよ！！くそ……あっ…」

雅人は今までに感じた事のない感覚に溺れ壁にもたれ掛かった…

なぜか視界が真っ白になる

なぜか寒気がしてきた

なぜか体が動かない

「俺らの牙から出る分泌液は神経毒と同じで確実に獲物を捉え…そして凌駕する…」

先ほどから立っているだけだった茶髪の男は突然そう告げた…

（何…言ってんだ…こんな真っ昼間から…）

もはや声も出せなくなった雅人は恐怖も感じなくなってきた…
大蛇の猛毒に蝕まれただ死を待つ獲物のように…

「人間見るのは久々でなぁ…どうもお前らを見てると体が血を吸えってウルサいんだょなあ…」

そう言い終えると茶髪の男は雅人へ向かって歩き始めた…

雅人は眼を精一杯の力で開け男達の姿を見た…

さっき倒した金髪男は立ち上がり眼と舌を様々な角度に回しながら笑っていた…

（化け物が…）

そう思った矢先の事だった…

信じられない光景が雅人に視界に広がる…
男達の全身を覆う皮膚がは徐々に剥げていく…
その皮下からは真っ白い皮膚が露わになっていく。

それに付け加え男達の爪や牙は伸びていた…
遂には背中から不気味な羽のようなものまで生えてきてる。

「悪いな…あんたは今回運がわるかったって事だ」

「あひゃ？もう吸っても良いのか？」

（化け物…いや、これじゃあヴァンパイアじゃないか…）

もう恐怖など感じなかった…感じる感覚すらもう分からなかった…

薄れゆく意識の中…ヴァンパイア達がだんだんと雅人へと歩み寄るのが分かった…

その時だった…

なぜか金髪男だったヴァンパイアが視界から消え去った…

と共に金髪男のヴァンパイアは壁に叩きつけられている。

雅人の目の前には…

（はは…吸血鬼の次は狼男かよ…シャレになんねぇ…）

ソレは一瞬雅人のほうを見た…

（ヤバいな…こりゃ死ぬわ…）

体長およそ２ｍ…その毛だらけの体で獰猛な顔立ちを見れば誰もが狼男だと思い、死を覚悟するだろう…

だが雅人の思いとは逆に狼男は茶髪男のヴァンパイアへと走っていく。

吸血鬼に掴みかかる狼男…その光景からここは日本か！？

雅人はそう思った。

「ちっ…なんでここに狼男なんかが！！」

吸血鬼はそう言うと華奢に見える体からはおよそ考えられない物凄い力で押し返す。

金髪男の吸血鬼も立ち上がり狼男に向かって飛び立つ。背中に吸血鬼の体当たりを受けた狼男は軽くよろめく。

その隙に吸血鬼達はまるで刃物のように鋭く長い爪を容赦なくふるっていった…

狼男はなすすべなくその場にガードした状態で座り込んだ…

（なんだ…あの狼男の動き…まるで素人じゃないか…）

狂気の連撃に感極まり狼男は雅人の近くまで吹き飛ばされた…

「きゃっ！！」

…きゃっ！？

（狼男がきゃっ！？狼男って男じゃないのかよ？）

そんな雅人の疑問はすぐに明かされた…

狼男の体は激しい酸が化合するような音をたてる

そして変化が訪れる…

雅人は前にも同じような光景に遭遇した事を思い出す…

たしか…あの時は…

まさに雅人の眼前にはあの時と同じ光景が広がる…

狼男の豊富な体毛は徐々に短くなり…その華奢な体が露わになる…

そして…雅人は理解した。

…路地裏に差し込む光によって輝く栗色の髪の毛…

そして右腕に張られた絆創膏…

見覚えのあるその姿は…

「杏樹…！？」

わけが分からない…

普通狼男は男であって、杏樹は女…こんな事あっていいのか！？

混乱する雅人を置いて吸血鬼達は弾丸のごとく迫ってくる…

「どっちも～、い～た～だ～きぃ～♪」

…雅人はちょっとムカついた！！

「あー！！もぅ訳わかんねぇよ！！

誰か説明しやがれ！！」

雅人はそう言って弾丸のように迫り来る吸血鬼を…

受け止めた。

「あ～！？なんだこれ～！？」

吸血鬼は受け止められた事に驚き声をあげた…

「ーっざけんな！！こんなんで死んでたまるかっての！！」

雅人はおよそ人間では有り得ない力で金髪男のヴァンパイアを地面に思い切り叩きつけた…

「へぇ…」

あくまで茶髪男の吸血鬼は一連の流れを静かに見つめていた…

グゥ…と声をあげた金髪男のヴァンパイアを茶髪男の吸血鬼は即座に起こしその体を拾い上げた…

「不確定要素ってやつか…いいねぇ…俺はあんたが気に入ったぜ…」

吸血鬼はニヤリと不気味に笑うとただそう言い残しその場からあっという間に消えていった…

「やっと…終わった…」

雅人はその場に力尽き倒れる…

「あ～…」

深いため息さえも体が痛んでつけない…

「早くこんな悪夢覚めねぇかな…」

杏樹は今だ眼を覚ましていない…

突然やって来た転校生…
謎が謎を秘めて悪夢は回り狂う…

満月は余りにも大きく2人を見つめていた…

だけれど…月は満ちたまま…

第5夜　ー余りにも衝撃的な1日ー（後書き）

ん～なんか今回はいい加減な作りになった気がします…（＜＿＞）

今回大事な場面だったんだけどなぁ（＊u＿u）

もしや…スランプ！？

皆様助けて下さい！！

第6夜　ー告白は突然にー

あれから数時間後…

雅人はボロボロな体のまま杏樹を背中に背負い運んだ。
運ぶ先はモチロン自分のアパートしかない…

街中からアパートまでは意外と距離がある…ましてや杏樹を担いで運んでいるのだから足取りが遅いに決まっている。

だから…

（あ～重てぇ…てかみんなこっち見ちゃってるょ…無理もねぇけどさぁ…）

確かに無理もない…

さっきみたいなわけの分からない状態で冗談じみた吸血鬼の奴らと争ったおかげで雅人や杏樹の服などは文字通りボロボロのボロッボロだ…
ついでに言えば杏樹の玉のような白い肌はかなり剥き出しになっており、さらに危ない事に杏樹の胸元がかなり厳しい状態となっている。

『おぉ…！！』

などと道行く男どもに歓声をあげられている事に気づき雅人は自分の着ている学生服の上着を着せる事にした。

と同時に男どもから

『サ…サイズ違いの上着…さらにっ！！付け加えてその寝顔！！……グッジョブッ！！』

などと更に感動と喜びの奇声に近い歓声があがったため雅人は眉間にシワを寄せた状態で睨みつけた。

男どもは一瞬にしてその場から有り得ない速度で消え去った。

（お前ら…その溢れんばかりのエネルギーを就職活動とかに使えよ…）

雅人は冷静にコメントする…

そんなこんなで雅人は約1時間…くだらない冒険を繰り広げましたとさ…。

「…つ…着いた…」

ようやく我が家の玄関に着くと改めて家に巣くう鬼神の存在を周囲を見渡し確認する…

「……よし…いない」

雅人は安全だと確認しマイホームの鍵を取り出した。

ただ…早く気づけばよかった…

部屋から聞こえる声に…

「ただい…」

声はそこで止まった…

そこには…鬼神…いえいえ…いつも美しい幸様がいらっしゃいましたよ…

「ウフフ…孝太郎君ってば！！」

なにやら幸様のご様子がおかしいようです…

よく見ると部屋の奥には孝太郎の姿もありました。

「あっ、雅人お帰り！！」

あ…わざわざそこで声掛けなくても…幸様にバレちゃうから…

「あら、お帰りなさい。雅人。」

……

おかしいおかしいおかしいオカシイオカシイおかしい！！！

何か今日の幸様はオカシイデス…

おっと…僕もおかしくなるところでしたね…スミマセン

とにかく今日の幸様は変です…何か悪いものでも食べたのでしょうか…

雅人はいっその事それでもいいと考えた…

「それじゃあ私は邪魔みたいだから帰るわね？孝太郎君…じゃあ後は宜しくね。雅人！！」

って気がつけばこっちに幸様が向かって来ています！！

ヤバい！！逃げるスペースも暇もない！！

『おい…お前』

いつものようなドスの効いた声が聞こえました…

『朝からよく問題起こしてくれるじゃんか…その娘は一体誰！？あとでタップリ深夜まで話聞かせて貰うから覚悟して待ってやがれょ…』

雅人は膝が震えていた…

「じゃあ孝太郎君…また今度ね」

今までに聞いた事のないようなわざとらしく優しさに満ち溢れた声で幸様は孝太郎に声をかけてます…

さっきのドスの効いた声はいったいどこに…

雅人は気づいた…

（あぁ！！そっかぁ！！幸様…ネコ被ってるのかぁ…どうりで…）

雅人はなんか…悲しみとある意味安心感に満ち溢れた。

孝太郎は手を振って幸様を送っていました…

「雅人…お前のお姉さん…かなりきれいだね！！」

雅人はとんだ間違いを正そうと言った。

「お前…あの女は――」

雅人はそこで喋れなくなった…

なぜなら玄関のドアから絶え間なく殺気が発せられていたからだ…

もちろん雅人に向けられて…

「ウン！！キレーデヤサシイネェチャンダヨ！！」

そう言うしかなかったんです…

「で…君らどうしたの…？」

孝太郎は雅人に疑問の目を向けている…

「……お前はなんでここにいるんだよ」

「学校終わったから心配になって寄ってみただけ。はい、話題変えないでね」

逃げられなかった…こんな会話をして約1時間…

まだ孝太郎の疑いの眼は晴れなかった…

そりゃそうだろう…

今孝太郎の目の前にはボロボロの格好になった杏樹が雅人のベッドで安らかな顔で寝ているのだから…

「みんな心配してたんだよ？うちの高校始まって以来の大惨事だって…」

孝太郎は必死に話しかけてくる…

「ねぇ…そろそろほんとの事話してくれない？」

それでも雅人は喋ろうとはしなかった…

（んな事言ったって俺にも分かんねぇよ…）

2人の間に沈黙が広がる…

その時だった…

突然杏樹がビクンッ！！と跳ね上がりベッドから転げ落ちた。

『あっ…』

雅人、それに孝太郎はその状況に唖然とし同時に声を上げた…

「キ…」

杏樹は初めて口を開いた…

「キャベツッ！！！」

『キャベツ…？』

あぁ…またサプライズな事が起こりそうだよ…

雅人は正直そう思った…

「てか…気絶してたんじゃなくて…寝てたのかよ…しかも寝ぼけて変な事言ってたし」

「ゴメンナサイ…」

杏樹は転げ落ちた時にオデコをぶつけたらしい…

ヒリヒリするのかさっきからオデコを押さえたままである…

「ほれ。」

投げて渡したのは冷えピタク〇ルだった…

「あっ…雅人君…ありがと…」

杏樹はすぐにオデコに冷えピタ〇ールを張ると目の前にあったホットミルクを飲む…

「あ…おいしい」

「それぐらいしか出せないけどさ…てかそれが限界…」

一同は爽やかに笑い始めた。

「……じゃなくて！！僕が聞きたいのはですねぇ！！ずばり…杏樹さん！！今日2人に何があったんですか！？」

孝太郎はいつにもなく真剣だった…

「だからそれは――」

「この際言っちゃいますけど…」

雅人の言葉は杏樹によってかき消された…

しかも…今の雅人には杏樹が言おうとしている事が鮮明に予想出来た…

杏樹は顔を真っ赤にしてそう叫んだ。

「実は私！！由緒正しきウルスフィードの狼おん――！！」

「あ〝――！！！いい天気だ！！」

2人は雅人の大声に圧倒される…

「雅人…今日曇りだよ…？しかもかなりどんよりとした…」

「はい！！この続きはまた明日！！はい！！また明日！！」

「ちょ…ちょっと！！まさ…」

有無を言わさず雅人は孝太郎をドアの外へと放り出した…

かなり無理矢理な展開である…

後日談だが…テレビで『おい！！お前！！！』と自分の筋肉に向かって叫ぶ某芸人がテレビに出ていたが、雅人は自分となぜが…デジャヴを感じた…

ドアの隙間から孝太郎が首を傾げながら帰る姿が見えた…

「ふぅ…これでなんとか…」

居間に戻ると杏樹が丸い眼を更に丸くしていた…

「あの…さぁ。まず謝っとくな…あの時いきなり怒鳴った事」

「えっ…そ、そんな！！いいですって！！
だいたい悪いのは私でしたから！！」

「ごめん…」

そう言った後その場に土下座する雅人…

「あの…」

精一杯に反省の気持ちを込める雅人…

そんな雅人に杏樹の口からは意外な言葉を言った…

「あの…そんな死ぬ覚悟にならなくても！！」

……？

「なぁ…今なんて？」

「えっ、それってジャパニーズ流“セップク“ってやつですよね…？ダメですよ！！そんな事で大事な命を断っちゃ！！」

そうか…わかった…杏樹は日本の文化を勘違いして覚えたんだ…

そうだ…そうに決まってる…じゃなきゃ切腹と土下座を間違う筈がないさ…

雅人は自分の心を必死で説得させた…

「どうでもいいけどさぁ…ソロソロほんとの事話してくれないかな…俺もいい加減混乱してんだ…」

「分かってます…ソロソロ言わなきゃいけないって思ってましたし…」

いきなり場の空気がシリアスな展開になっていた…

「私…！！」

雅人は唾をゴクリと飲む…

「私…狼男ならぬ…狼女なんですっ…！！」

杏樹は顔を真っ赤にしてそう言った…

雅人は…

「あ、ごめん。それは分かってる。」

辺りにしらけた空気が流れた…

杏樹は更に目を丸くしていた…

その瞳には一筋の雫が…

「えっ、えっく！！せっかく…せっかく勇気出して言ったのに～！！雅人君のバカァ！！」

（…訂正！！訂正！！もう雫どころじゃないって！！凄い勢いで下の畳に染み込んでるし！！）

「だ～！！やめっ！！
これ以上アパートだめにするとあの鬼に架空請求取られっから！！」

雅人はその時奇跡の発想が頭に浮かんだ！！

「そうだ！！あれを！！」

雅人は急いで冷蔵庫からアレを持ってくる…
テーブルに叩きつけられたソレは…

「あ～わかった！！分かったから！！このキャベツでも食って落ち着きやがれ！！」

…辺りが急に静かになった…

ソロ～っと雅人は顔を上げてみた…

そこには恍惚の表情でキャベツを見つめる杏樹が…

「待てっ！！」

なぜか思わず言ったその言葉は正解だったらしい…

杏樹は欲望を抑えながらよだれを垂れ流しそうな勢いで目の前の宝をただ見つめていた…

「……よし！！」

雅人の言葉と共にキャベツは5秒とかからず消え去った…

（なんか…イロイロ突っ込みたいな～）

とりあえず…心のなかだけで叫ぶ事にした…

（犬かよっ！！）

雅人の思いが伝わったとは到底思えなかった…

「あ～…なんか最近訳わかんないなぁ…」

孝太郎は1人帰路を歩いていた…

「それに…最近の雅人の様子といい…それに杏樹さんも…」

そう考えてるうちに家が見えてきた…

「考えるのは明日にしよ…」

その時だった…

家の前の電柱の辺りから笑い声が響く。

（やだなぁ…苦手なんだよな…こういった人達…）

目の前では金髪と茶髪のいかにも不良といった男が2人立っていた…

その2人は罵声に近い笑い声を幾度となく吐き散らしていた…

（関わりたくないしさっさと家に入っちゃお…）

男達は孝太郎が目の前を通るとさっきにもまして下品な笑い声を発していた…

家に入ろうとした時だった…玄関の入り口を踏んだところで孝太郎は茶髪の男に声をかけられた…

「なぁ…お前雅人君のお友達？」

意外にも丁寧な言葉を使われたので孝太郎は返事を返してしまった。

「は、はい…そうですけど？」

「そっかぁ～♪ヤッパリィ～」

残る金髪の男も声をかけてきた…こっちのほうはいかにも言語障害のような言い方である…

「ねぇ…君の事もよく知りたいんだけどさ」

「えっ？…」

その瞬間だった…異質な光景が孝太郎の眼前に広がる…

男達の皮膚がボロボロと剥がれ落ち真っ白な肌が剥き出しになった…

続いて歯が野獣の牙と化す…

「え…えっ…？」

孝太郎は訳が分からないでいた…

だけど…一瞬で理解した。

「ばっ…！！化け物！！！」

男達…いやヴァンパイア達はニヤニヤと笑いながら孝太郎に近づく…

「そう言うなよ…お前の事も教えてくれよ…」

「そうそう♪」

それでも吸血鬼達はなおも距離を縮めていく…

「やっ…やめて！！やっ…たっ！！助けて！！」

（雅人……！！）

満月は無情にも怪しく輝いていた…

それは時の始まり…

第6夜　ー告白は突然にー　（後書き）

どうでしたでしょうか…

なんとかスランプ！？を脱出したかに思われる作者ですが…

今回の話はかなり作者もおかしくなってしまったと思います…（＜＿＞）

これもスランプなのですかね…？

こんな作者ですが励まし＆支えになってくれる言葉募集です！！

こんな作者ですが…ど～かよろしくお願いします！！（ｂ＾＿゜）

第7夜　ー思いー

…あれから徹夜で杏樹の話を聞いた。

その言葉一つ一つから杏樹の辛さが身に染みて伝わったくる…

一族を皆ヴァンパイア達によって失い…そして父親までも…

雅人は杏樹の辛さが分かる気がした…

幼い頃に両親を失い…その愛情を受けることなく育ってきた…

強くならなきゃ…その一心で自分の気持ちさえ覆い隠してきた…

だけど…

人は何かを失って初めてその大切さを知るのだ…

「そんな深刻な顔しないで下さい！！私は大丈夫ですから…」

そんな事を言う杏樹の顔が一番見ていて辛かった…

一番無理してんのお前じゃん…

「一番無理してんのお前じゃん…」

「えっ…」

頭で思った事がそのまま言葉として出てしまった…

「辛かったらさ…我慢するなよ…」

雅人の精一杯の言葉は杏樹へと向けられる…

その瞬間…杏樹は我慢出来なくなり…

そして

雅人の胸へと倒れ込みそのまま…泣き続けた…

（無理もないよな…まだこの年じゃ目の当たりにしたものが大きすぎる…それに失ったものも…）

杏樹の涙は枯れることがなかった…もはや言葉にならない声が響き渡る。

大丈夫だから…

「大丈夫だから…」

その気持ちはまた声に出ていたらしい。

雅人は自らの発言に顔を赤くしながらも言葉を止めようとしなかった…

「大丈夫だから…俺が…俺が杏樹を守るから…」

杏樹は泣くのを止め…そしていつもの輝き溢れんばかりの笑顔で雅人を見つめた…

「あのっ…ほんとにありがとうございました！！」

杏樹はそう言うと恥ずかしそうな眼で雅人に何かを求めた。

（……まさか…）

雅人の思考は一時的にストップする…

（まさか…まさか…マサカ！！この局面！！ヤバすぎる！！絶対そうだ…アレだ！！）

雅人は杏樹の顔を再確認する…今でも変わらず視線は雅人へと向けられていた…

（くっ…ちくしょう！！ここで断ったら男がすたるってやつだ！！）

雅人は深く深呼吸してアレに備えたのだが…あまりの緊張に途中から呼吸がラマーズ法になっていた…

（よ～し！！いくぞ！！いっちゃうぞ！！もう止まんねえぞ！？あー！！ナムサン！！）

「あの…」

雅人は無理やり心のサイドブレーキをかけた。

「あの！！いっぱい泣いちゃったらお腹が空いてきちゃいました！！」

…杏樹はそれを我慢してたらしい…

……どうりで恥ずかしい顔をしてたわけだ…。

雅人はサイドブレーキのかけすぎで勢いよく台所の食器棚へと激突した。

まさに昭和の漫才さながらの行動だった…

激しい音を立てた後大量に割れた食器類の中から雅人はムクリと立ち上がる。頭からはおびただしいほどの出血をしていた雅人だが…意識があるのかわからないまま冷蔵庫へと向かった…

「あの…大丈夫ですか…雅人？血だらけだけど…大丈夫！？」

杏樹が何か優しい言葉をかけてくれた気がしたけど聞こえない事にした…

例のごとくキャベツを出した後雅人は壁へと頭を叩きつける…

（私は欲望に負けました…私は煩悩に負けました…）

「あ〝ーっ！！！」

そして例のごとく大声で叫び終わった頃には雅人は正気を取り戻した…

一段落ついて学校に行こうとすると、雅人の眼にあるものが見えた。

「なぁ、杏樹。それって…何？」

「え？」

雅人はそれを指差した。
杏樹の首もとに刻まれた刻印を…
「あ…」
一瞬2人が固まった…
「忘れてました…」
「何が？」
「この刻印の意味…」
「はぁ？それってどういう…」
何もかも突然に繰り出された話に雅人は混乱を隠せなくなる…
「大事な話なのに…どうしよう…忘れてました…」
そう言って突然その場に泣きじゃくって止まる杏樹…
「おい…まず落ち着いて話せって！！」
いきなりわけの分からない話をする杏樹の普通じゃない様子に雅人はますます頭が混乱するばかりだった…
「じゃあ…話しますよ？」

杏樹は涙を拭い静かに口を開き始めた…雅人は気持ちを落ち着かせただ…杏樹の言葉へ耳を傾ける

「この刻印は…この刻印を持ってる者は力を解放する時…世界を滅ぼすってお父様に言われたんです…」

雅人の思考の中でその答えは出た…

「……それって…杏樹が…世界を？」

杏樹は静かに首を縦に振った後言った…

「お父様の話だと…刻印が解放されるのは…もうすぐの話…みたいです…」

いきなり信じられない言葉を聞かされた…
つまり近いうちに杏樹の刻印は…
それでも杏樹は尚も語り続ける…

「分かんないんです！！自分がどうなるかも…怖いん――」

ポン…と杏樹は頭を優しく叩かれた…

「そういうのは始めに言えっての…全く…てか今更狼女とかヴァンパイアとかが出てるんだから何も怖くねえっての！！」

雅人はそれだけ言って杏樹の眼だけを見た。

「言ったろ？俺が…杏樹を守るって…
どんな事になったって俺は杏樹を守るから。」

雅人はそれ以上何も語らなかった…

「ほれ！！いくぞ！！学校遅れちまうし…ってかやべぇ！！こんな時間だっての！！」

杏樹は笑って雅人の後をついていった…

雅人にはまだ伝えてない事がある…

〔されど光あらざれば刻印、相反し光とともに照らすだろう〕

（お父様…今ならその意味分かる気がする…）

「ちょっと待って！！雅人君！！早いから！！」

光を…見つけたと…

満月は時を刻んでいた…

第7夜　ー思いー（後書き）

え～…まずゴメンナサイm（＿＿）m

今回は大変短いです！！大変意味が分かりません！！

今回ちょっとラブストーリー的な感じにしようと思ったのですが…

こんな駄文になってしまいました！！

大変ヤバいですね！！

ほんとの事言えばもう終盤なのに…

あ～しっかりしなきゃ！！

こんな作者に励ましの言葉をください！！

頼みます（＜＿＞）

第8夜　ｌｍｉｄＫｎｉｇｈｔ　ｔａｌｅｌ

「え…孝太郎来てないんですか…」

クラスの担任は出席簿の孝太郎の欄に×と記入していた。

「先生！！あのっ、あいつから連絡は？」

担任はビクビクしながら答えた。

「あぁ…怒らないで…孝太郎君には放課後プリントを家に届けに行くから…」

見た目から何やらなんて頼りなさそうな担任なんだろう…

（ぜってー任せておけなそう…だな）

「いいっすょ先生。プリントは俺が届けに行きますんで！！」

「あぁ…はぃぃ～！！」

そう言って担任は過剰に体をビクビクさせながらプリントを雅人に渡した…

「ねぇねぇ、雅人君！！2人で孝太郎君の家行こ！！」

「ん…あぁ」

放課後まで机で寝ていた雅人に杏樹は話しかけた…

朝あれだけの事があったのに杏樹の元気さは変わりがない。

（それが…杏樹のいいとこなんだけどなっと！！）

雅人は勢いよく立ち上がると鞄を持って歩き出す。

「モタモタしてっと置いてくぞ、杏樹」

「待って待って!!雅人君!!」

その場にいたクラスの一同はラブコメに等しい会話をただ唖然と聞き入るだけだった…

「…と、確か孝太郎の家はここだよな」

どこにでもありふれた中流家庭の家である…

一見したところかの〔未来から来た猫型ロボット〕が滞在する〔の〇太君〕の家のような作りである…

まぁ孝太郎も眼鏡だから若干理にかなっている…と思う

ピンポーン

ありふれたチャイムと共に勢いよく出てきたのは孝太郎ではなく…孝太郎の母だった。

「孝太郎！！…あっ…雅人…君…？雅人君！！孝太郎はどこ！？孝太郎が…孝太郎がいないの！！」

孝太郎の母親は酷く慌てている様子である。
雅人の腕を必死に掴むその姿は何か異様なものだった…

「ちょっ…ちょっと…オバサン！！どうしたんですか！？孝太郎は…」

我に返ったのか孝太郎の母は一旦落ち着きを取り戻した。

「孝太郎が…昨日から帰ってこないの…雅人君！！孝太郎がどこ行ったか知ってる…？」

孝太郎が…帰ってこない…
あのあと俺は孝太郎を帰してそれで……

そこからは分からない…

雅人は孝太郎の母に叫ぶ。

「オバサン…俺…アイツを探してきます！！杏樹っ！！」

「う、うん！！」

そう思うより先に体は動いていた…

胸が熱くなっていく…

（くっそ…嫌な予感がする…孝太郎…）

雅人の頭には一つの考えが浮かんでいた…

奴らが…

ヴァンパイアの連中が孝太郎を…

確信は持てない…だか今は確信以上にそれしか考えられなかった…

雅人は息の続く限り走りつづけた…

あれから三時間あたり…雅人は街の隅から隅までいたるところを走りつづけた。

だけど…孝太郎の姿はどこにも無く気がつけば自分のアパートへと帰路を歩んでいる自分がいる事に気づいた…

「くそ…情けねぇ…」

自分の不甲斐なさに頭がくる…

（オバサンになんて言えば…俺があの時…孝太郎を…）

そんな雅人に杏樹は…

「…雅人君は頑張ったよ…ね…元気出そうよ…」

杏樹の声が尚も雅人に響いた…

「俺が…アイツを帰さなきゃ…こんな事にはならなかったんだよな」

「雅人君は…悪くない…！！」

杏樹は大声でそう叫んだ…

「みんなに迷惑かけたのも私だし…それにこんな事になったのも…

元はといえば…私が悪いから！！」

（ゴメン！！）

なぜかその言葉が頭に浮かんだ…

そう言ったのは他にもなく…孝太郎だった…

（や～いや～い！！悔しかったら取り返してみろ～）

（やめてよ～それは大事なものなんだから！！）

懐かしい光景が思い出されていく…

これは確か…俺と孝太郎が初めて会った時…

はは…そうだったな…孝太郎がこの街に引っ越して来て溶け込めないんで近所の悪ガキにいじめられてたっけ…

（お前ら！！弱いものイジメはやめろ！！正義のヒーロー　雅人が許さないぞ！！）

あ…これって俺か…恥ずかしい事言ってんな…

（誰だよ！！お前！！生意気言ってるとお前もいじめ――ぐはっー！！）

いや…そこまでやらんでも…

雅人の目の前では子供の頃の雅人が半虐殺行為を繰り広げていた…
悪ガキの一人はすでに痙攣しているようだった…

うわ…我ながらやばいな…

（お前らにこの雅人様がやられるかっての！！）

（あの…）

（ん…？）

孝太郎の声に雅人の動きは止まった

（あの…ありがとうございます！！僕この前ここに引っ越して来たばっかりで…友達もいないからいじめられてて…）

雅人は孝太郎の顔をまじまじと見ていた…

そして…

（じゃあ俺が友達第一号だな！！宜しくな！！俺雅人！！え～と…お前の名前は…？）

雅人は静かに右手を差し出した

（孝太郎！！僕孝太郎って言うんだ！！よろしく…えと…雅人君…）

徐々に遠慮がちになっていき声が小さくなる孝太郎…

（お～い！！ちゃんと眼を見てしゃべろよ！！あと…君はいらないよ！！ほら！！孝太郎…握手握手！！）

雅人は孝太郎の微かに震えた手を取り握手を交わした…

（ゴメン！！雅人！！）

これが初めて雅人に言ったゴメンだった…

「孝太郎！！」

雅人は立ち上がった

「俺…まだアイツのゴメンを充分聞いてねぇ！！
こんなとこで終わらせれねぇんだよ！！」

それは理由として全く幼稚なものだったが…雅人にとっては充分なものだった。
雅人の拳に再び力が入る…

「まだ…まだ諦めてたまるかっての！！
杏樹！！孝太郎を探すまで俺は――」

その時だった…
雅人の声はそれによって中断される

激しく窓ガラスの割れる音がした…

（この音は…俺のアパートからか！！）

雅人は全力で走る…

ドカッ！！！

雅人は思い切り玄関のドアを蹴り込んだ…もはや鍵などゆっくりと開ける猶予などはない！！

ドアを蹴り破り居間へと土足のまま走り込む…

そこには…

「よぉ…遅かったじゃないか…」

茶髪で挑発的な眼をした男…そう…あの日雅人を襲ったヴァンパイアが悠長に座っていた…

「アアアァァァー！！」

雅人は真っ先にそいつへと拳を走らせた…

しかしそれは届く事無く雅人は突風のような風の固まりに押し返された…

「ぉわあぁー！！」

雅人は思い切りガラス戸へと体を叩きつけた…

「雅人君！！」

杏樹は急いで雅人へと駆け寄り同時にヴァンパイアを睨みつける…

一方…茶髪のヴァンパイアは突風を起こしたとされる背中の翼を羽ばたかせながら余裕の表情をしている…

「まぁまぁ…そう怖い顔するなよ…狼のお姫様！！」

「……！！なんでそれを…」

「なんでって…バカだなぁ…バレてないとでも思ってたとか！？俺らヴァンパイアは君を追ってきたんじゃないかぁ～。まぁ正確には君のその刻印を追って…だけどね…」

「こんな物のために…あなた達はこんな罪もない人達を…」
杏樹は涙ながらにヴァンパイアへと叫んだ。
その瞳に怒りが宿る杏樹とは逆にヴァンパイアはいまだ余裕をなして指を左右に振っている…
「勘違いしないでくれよ…君が思ってるよりもその刻印は恐ろしくも素晴らしい物なんだょ…？今に君にもハッキリ分かるさ…文字通りね…。
まぁヴァンパイアは君のその刻印を狙ってるけど俺は違うんだ…俺はそこの男に用事がある…」
と、笑い越しに杏樹をあざけ笑う…
「君に興味がわいたって言ったのは覚えてるよね…雅人君？」
「たいそうなご指名だな…化け物野郎…」
吐息がかすれて意識が朦朧としながらも雅人は精一杯の声を出して答える…
そんな姿にヴァンパイアは面白そうに苦笑する…

「これ…な～んだ？」

ヴァンパイアがある物を指でつまみ上げた…

それは他でもない孝太郎の眼鏡だった…

すでにフレームが曲がりレンズが割れてるが雅人にはすぐ分かった…

「時間切れ～正解は眼鏡でした～」

「てめぇ…それ…どうした…」

「人質っていうんだっけ？こういうの？」

「くそやろう…！！孝太郎をどこにっ…！！」

「まぁそれは雅人君の心構えしだいってやつだね」

「ふざけんな！！」

怒りを言い放ち雅人は再度拳を放つ！！

「全く…」

再び突風を発して雅人を近づけない…

ヴァンパイアはその羽を部屋全体に広げ宙に浮いた

「雅人君のその力はどこから来るのやら…気になってしょうがないね」

あくまでもヴァンパイアは笑って雅人を見る

「さて…一足先に向かうとしようかな。俺は君を待ってるよ！！」

「てめっ…！！まだ話はっ…！！」

激しく吹き荒れる突風…ヴァンパイアはその場から姿を消していた…

「くっそ！！あのやろう…休んでる暇はねぇ！！」

「雅人君！！待って…」

必死に雅人の腕を掴み止める杏樹。

「悪い…杏樹。俺、孝太郎のやつを…あ…杏樹…？」

何かが変だった…その場の空気…空間そのものが異質のものとなっている…

「杏樹…杏樹！！」

杏樹は雅人の腕から手を離しそのまま倒れこんだ。

「ゴメンナサイ…なんか…体が変なの…」

すぐさま体を起こし上げ額へと手を当てた

通常考えられる熱ではない…まるで体の中から沸騰してるようだった…

そして…まがまがと赤黒く輝く首もとの〔刻印〕

「近づいてるって事か…刻印の解放ってやつが…」

それだけは雅人にもハッキリと断言できた…もう時が近づいてると…

「そう…みたい…ゴメンね…こんな時に…」

雅人は大丈夫とだけ伝えた。

強がりだった…どうしようもない状況には変わりない…時はどちらも確実に迫ってきている…

「私…大丈夫だから！！行こう…孝太郎君、待ってるよ！！」

困惑する雅人に声をかけたのはほかでもない…杏樹だった。

「杏樹…お前」

足は小刻みに震え立ってるのもままない状態だろう…
それでも杏樹はいつもの笑顔で雅人を見つめた

「ね…私頑張るから！！」

（なんで…くそっ！！）

それ以上言葉が続かない…

だけど…

「しっかり掴まってろよ！！杏樹！！」

「うんっ！！」

雅人は杏樹を背中に乗せ走り出す！！

外を出ると異様な光景が空へと広がっていた…

「これ…は…」

空一面へと広がる漆黒の翼たち…

「ヴァンパイアが…こんな…」

そいつらは牙をとがらせ群れをなしてひっきりなしに空を飛び交い獲物を探していた…

「なんで…こんな…」

雅人は絶望する

「雅人君!!前!!」

「えっ…おわっ!!」

一匹のヴァンパイアがこちらに気づきその長い爪に狂気を込めて襲ってきた。

「…んのやろっ…!!」

左へステップしてようやく交わしたが反撃をする事は出来ない…

杏樹を一人にすればそれこそ攻撃どころではない

（この状況…どうすれば…）

気がつけば辺りには二匹のヴァンパイアが取り囲んでいた…

「シャアアアァー！！！」

間もなくそのうちの一匹が襲いかかる。

「それどころじゃ…ねぇんだよ！！！くそったれ！！」

雅人はタイミングを合わせ蹴りを浴びせる！！

見事蹴りが決まりヴァンパイアは雅人の足元へと倒れ込む…

（よし…このまま！！）

ヴァンパイアは一瞬怯むが隙を作ることなく雅人の背面から飛びかかろうとした…

「これでっ！！――っな！！」

先ほどと同じく蹴りを繰りだそうと足を動かそうと軸足を前にする…

だが、行動はそこまでだった…

右足首を先ほど倒したヴァンパイアががっしりと掴んで離さない…

「貴様等、人間ハ…ワレラに捕食されるのだ！！」

その眼には狂気が宿る…

「離しやが…っ！！」

すぐそこまで…もう一匹のヴァンパイアが迫る…

（ここで終わりかよ…！！孝太郎…杏樹…）

ヴァンパイアは距離を縮め…

そして…

ガキンッッ！！

何かの金属音だけがし…その場に静寂が広がる…

攻撃が来ない？

そんな疑問を抱え雅人は静かに眼を開ける…

「あ…」

「全くウルサいと思ったら何がおこってんだか…」

そこには…

「姉貴っ！！」

「ウルサいぇ！！一体何がどうなってんのか説明しやがれ！！」

幸は日本刀一本でヴァンパイアの動きを止めていた…

「コノ…人間ごときガァ…！！」

「あぁもう！！わけわかんないんだょ！！化けもんでも何でもいいけどアタシのアパートこわすんじゃないよ！！」

幸はそう言うと刀で弾き飛ばし向かってきたヴァンパイアにカウンターの〔幻の左フック〕を浴びせ文字通り一撃の下に沈めた…

鬼神のごとき強さを人外のヴァンパイアにまで見せつけた幸は凄い勢いで雅人へと向かって走り出す…

「ったく！！お前もとんだ彼女連れてきたな！！アタシのアパートどうしてくれるんだよ！！」

そう言って雅人の足首を掴むヴァンパイアを蹴り込んだ…

あまりにもその姿は戦慄である…

「おいっ！！」

「はいっ！！」

今の幸を怒らせない方がいい…そう思った雅人は即座に返事した…

「これ…持っていきやがれ！！」

そう言って差し出されたのは幸がさっきまで保持していた日本刀だった…

「これって…」

「さっさと行きやがれ！！！大変なんだろ！？」

少し間を置いて雅人はやっと言えた…

「ありがとう…俺…行くから！！」

幸は何も喋らなかった…

その瞬間幸へとヴァンパイアが襲いかかる！！

幸は鬼神の動きでヴァンパイアへと〔戦慄の膝蹴り〕を喰らわした…

一瞬のうちにヴァンパイアは片づけられた…

その瞬間幸は大声で叫んだ。

「おい！！」

その言葉に雅人は振り返った。

「……負けんじゃねぇぞ！！」

「ああ！！」

雅人はそう言って右手の親指を立て高々と掲げた…

幸は無言で親指を高々と掲げた

（絶対負けんじゃねぇぞ…）

その言葉が雅人に伝わったかは分からない…

だが…雅人は走りつづける…

満月は狂おしいほどに咲き乱れる…

鮮血の刻を知らせるが如く…

第8夜　ｌｍｉｄＫｎｉｇｈｔ　ｔａｌｅｌ（後書き）

どうも、疲労困憊の作者です…（＜＿＞）

いえ…なんでもないです！！

皆様のためならたとえこの身が朽ち果てようと…！！

…とりあえずお休みなさい…

これからも応援よろしく…お願い…しま…すＺＺｚｚ．．．．

第９夜　ー刻印ー

（雅人君！！どこかに遊びに行こうよ！！）

アパートのチャイムを鳴らしながら孝太郎はウキウキしていた。

（だぁー！！うるせぇ！！今何時だと思ってやがる！！）

（何時って…もう午前の１０時だよ？雅人君ってもしかして夜型の人間？）

ドアを蹴り飛ばし出てきた雅人に怯むことなく孝太郎は問いで返事を返した。

（って、うるせぇよ！！俺が何時に起きようと勝手だろ！？）

（雅人君ってミイラかヴァンパイアみたいだね。朝日を浴びたらヤバいみたいな感じが…）

（…一言二言お前はいっつも多いんだよ！！しかも俺がそういうホラーが嫌いな事知っててていうんじゃねぇ！！）

（雅人君かわいいなぁ～）

ボゴッ！！

孝太郎の頭に拳が振り落とされた…

（った～！！…痛いょ～…雅人君）

（二度と可愛いとか言うなよ？
それと君って付けるなっていうこと忘れたのかよ？）

（え…あ…ゴメン！！…ゴメン！！雅人！！）

孝太郎が謝るその前に雅人は孝太郎のこめかみをグリグリグリと痛めつける…

ギャ～！！と悲鳴があがったのは無理もない…

（で…どこいくんだよ？）

先ほどまで赤々となっていたこめかみを押さえていた雅人は待ってました！！と言わんばかりの反応速度で立ち上がった。

（あっ！！それなんだけど、いつもの公園行こうよ！！）

（げ…またあそこかよ！！坂登るのだるいっての！！）

明らかに拒否反応を見せる雅人とは正反対に、孝太郎はこれでもばかりかと言わんばかりに瞳を輝かせながら雅人の腕を引っぱる。

（今日は絶好の観測日和なんだよ！！雅人！！）

（って…おわっ！！引っぱるな！！俺まだシャツすら着てねぇっての！！ちょ！！ちょっと待て！！
ちょ…なんでお前、こんな力あるんだよ～！！）

嫌がる雅人、喜ぶ孝太郎…

人は無くした物を追い求める…

たとえ戻らないとわかっていても…

だけど…人は思い続ける…

「…雅…人」

しばらくの間長い夢を見ていたらしい…雅人と遊ぶ夢を…

（そっか…あの日もここで遊んだんだっけか…）

この公園は街の高台にあり雅人の家から2キロと離れていない。

そして長い間2人で遊び続けた思い出の場所でもある…

「さらわれたんだよね…」

力無く孝太郎は呟いた…

1人呟いたつもりだった…

「そうだょ～♪君は俺達に拉致られたんだよ～♪」

突然帰ってきた返事…それは後ろから聞こえてきた。

「起きたんだ～♪孝太郎く～ん♪」

あくまで陽気な声…その声は聞き覚えがあった…

「あなたは…あの夜の…！！」

声の主か徐々に近づいてくるのが分かった…

（あ…あ…逃げなきゃ！！）

あの夜…孝太郎はこいつらにさらわれた事を思い出す。

そう…人間じゃない何かに…

そう考えると逃げなきゃいけない事はすぐにわかった…

（早く逃げ……）

体が動かない事に気づく…暗闇で今まで分からなかったが…ようやく自分のたたされてる状況に気づいた…

全身を覆い尽くす…黒い固まり…

「動かないほうがいいぃょ～♪そいつら動いたら一瞬で血を吸い取っちゃうから♪」

一度思考が固まったがすぐにソレを理解した

「ひっ…！！」

まるで全身の神経のようにビリビリと這うのが伝わってくる…

それは血に飢えたコウモリの群れだった…

（雅人！！雅人！！）

その瞬間…視界が暗くなり目の前に人が立ったのがわかった…

「雅人！！」

思わず叫んだその先には…

「やぁ…孝太郎君？」

茶髪の髪…そして口元から大きくはみ出た長い牙に爪…そして天をも隠さんとする程の大きな翼。

ようやく分かった…

「あなた達は…ヴァンパイアなんですね…」

「ようやく分かったんだね♪」

目の前に広がる現実離れした光景…そしてヴァンパイアの陽気な声がさらに孝太郎の恐怖心をあおる…

「じゃあ君のたたされてるいる状況も分かってるよね?」

孝太郎はその言葉の意味を理解した…全身を覆い尽くすコウモリの群れ…そしてヴァンパイア達。

「人質って事ですか…?」

孝太郎のその問いにヴァンパイアは笑って答える…

「う〜ん…ちょっと違うかな?
君が居ることで雅人君はここに来る…
俺は雅人君に会いたいんだよ…
俺は雅人に会いたい…雅人に…!!」

徐々にヴァンパイアのその顔は狂気へと顔を歪めていく…

「さぁ…雅人に会わせてくれよ…さぁ早く！！」

そう言いそのとがらせた爪を孝太郎の頬へと滑らせる。

それだけで孝太郎の頬は綺麗に切り裂かれ鮮やかな紅が月夜に映し出される…

「ああぁ…我慢出来ない…狂おしいよ…さぁ雅人！！来ておく―」

そこでヴァンパイアの言葉は途切れた…

そこには…

「雅人…！！」

孝太郎がそう言うと、雅人の黒髪が月夜によって照らし出される。

満月がそこに存在するもの全てを照らし、また潰れそうな静寂がその場を支配する…

そして今…雅人は対峙する…

「さぁ…雅人…始めようか…」

「雅人…よかった…」

孝太郎は今にも泣きそうな顔をしている…

「ごめんな…孝太郎…今、助けっから…」

孝太郎へと慈愛に満ちた顔で見ると同時に杏樹に声をかける

「杏樹…すぐ終わらせるからな…もう大丈夫だ」

「…まさ…く…」

今にも意識が飛んでしまいそうな様子の杏樹に雅人はポンと頭を撫でる…

「大丈夫だから…」

「…うん」

杏樹は力無くその場にもたれかかるようにして倒れる…

瞬時に腕をその体に添えてゆっくりベンチへと降ろす。

「俺が…守るから…」

そう言い終えると雅人は拳を強く握り締め視線の先に存在するヴァンパイアへと異様なまでに鋭い眼光を向ける…。

大概の人はそれだけで命を奪えるほどだった…

そしてそれぐらいの覚悟で雅人はヴァンパイアへと向ける…

まるでそれは獣の眼だった…

空気が沈黙を表す。

そう表現するほどの静寂が孝太郎までを襲っていた。

その静寂を断ち切ったのはヴァンパイアの声だった…

「あぁ…幸せだよ…雅人…俺は今幸せだ…！！」

ビキビキと音を立ててヴァンパイアの爪と牙が異様なまでに伸びていく…

そしてその大きな翼は砂埃を竜巻のように巻き上げ視界いっぱいに広がっていく。

自然界では相手に自分をより大きく…より強く見せるためそのような行動に移る…テレビで学者はそう言う…

だが…目の前で繰り広げられる光景は違った。

無駄なく…そして一撃の元に相手を捕食する…

そんな自然界のルールにのっとった構えである。

おそらくあと一瞬のうちにどちらかが動き…そして決着がつくだろう…

深く…そしていつでも行動に移せるよう深呼吸する…
額に一滴の汗がにじむ…
雅人の体全体に緊張が走る…次の瞬間には全てが動く…そう分かって腕の筋からピリピリしていく…

日本刀を改めて握り直す…
そう…時が来る…今までとはまるで違う…
殺意と殺意がお互いぶつかり合いそして殺し合う…
手がピクリと反応した…

その時だった…

先に動いたのはヴァンパイアだった。
ヴァンパイアはその大きな翼をムチのようにしなりあげる…
その瞬間驚異的なスピードで翼に弾かれた小石が弾丸のように襲いかかる…
それを雅人はサイドステップの要領で避け……

一瞬の出来事だった……

ヴァンパイアは小石を布石にし、雅人の死角へ潜り込んでいた…

「いただきだょ…」

迫り来る狂気の固まり…

雅人はそれを真正面で受け止める―

「ジャアアアー！！！」

この世のものとは思えない叫び声をあげてヴァンパイアは力の全てを預ける…

その力の差に最初に反応を見せたのは日本刀だった。

すでに刀身にはひびが入ってきておりいつ折れてもおかしくない…

雅人は悲鳴にならない声をあげながら力の全てを受け止めている…

「く…っそがぁー！！！」

驚異的な力で絡みついたヴァンパイアを払うよう日本刀を振り上げる…

瞬間にヴァンパイアはそこから離れ距離を取る…

雅人は理解する…次が最後の瞬間だろうと…

「へぇ…なかなかやるんだね。人間でも」

その言葉が示す通りヴァンパイアの頬には一筋の鮮やかな赤が月夜に映えていた…

それでもヴァンパイアは恍惚の笑みで雅人を見つめる…

「君に出会えて嬉しかったよ！！だけど…君は人間。俺はヴァンパイアだからね…違う形で会ってれば…か」

再び捕食者の構えになる…全身を覆う筋肉がビキビキ音を立てて直にその時を知らせる…

「じゃあ…終わりにしようか…」

刹那…爆発…一瞬にして舞う砂埃。

確実にこの世のものとは思えない速さで時は動き出す。

ヴァンパイアの放つ鋭く刃物より鋭利なその爪は雅人へと一直線に向かう。
狙うはその雅人の肢体…

弾丸より真っ直ぐそして正確な攻撃は雅人を捉えー

そこに確実にいた雅人の姿はなかったー

そして時は来る…

ズ…

確かにそんな音がした…

有り得ない方向からである。
音がしたのはヴァンパイアの腹部。

「一瞬…」

有り得ない方向から響く雅人の声…

「ほんと…一瞬だったな。」

ヴァンパイアはニヤリと笑い

「そう…みたいだ」

一言そう呟いた…

ヴァンパイアは雅人の言葉に答える…もしくはそれは自分自身に向けた言葉だったのかもしれない…

雅人は日本刀を振り上げた…

同時に神経や筋肉組織が引き裂かれる鈍いが音がする…

そしてそれは砂埃と共に脆く崩れ落ちた…

雅人は夜空へと顔を向ける…丁度雲で隠れていた満月の姿が露わになっているところだった。

そして先ほどまで生死をかけた闘いの相手が月夜によって静寂の姿を照らしている…

そしてその体は砂埃のように崩れ…宙へと舞い散った。

それが終わりを告げていた…

もう片方のヴァンパイアの姿は既に消えていた…

雅人は真っ先に孝太郎の元へと向かう。

全く人外な出来事だらけで雅人の体は限界に達していた…

足はおぼつかなく既に千鳥足になっている…

ついに自体重を支える事が出来なくなり雅人は倒れる…

「…と！！」

（うるせぇよ…でけぇ声出すんじゃねぇ）

「…さと！！」

（怒らせるのもいい加減にしろよな…俺は疲れてんだよ…）

「雅人！！」

「あぁ！！うっせぇ！！何度もおっきな声で叫ぶんじゃねえ！！孝太郎！！」

そこには顔中を涙と鼻水で溢れさせた孝太郎の姿があった。

「ゴメン…本当にゴメン…」

「怪我…ねぇかよ…」

「うん！！」

孝太郎は涙を拭い応えた。

雅人はそれに笑顔で答える…

「あ…動かないで！！雅人！！」

雅人は大事な事を思い出す…

「んな事言ってらんねぇんだ…悪い…俺、杏樹のとこ行かなきゃ…」

「まさー」

「オバサン…心配してたぞ？早く行ってやれよ…」

それ以上…孝太郎は何も言わなかった…

「ありがと…雅人…だけどさ…ちゃんと生きて帰ってきてよ…」

孝太郎はすでに気付いていた…この闘いが人が関わっていいモノではない事を…

どうしても不安を隠す事が出来ず雅人のそばへ駆け寄る。

「ねぇ…雅人。絶対帰ってくるよね…僕…雅人がいなきゃ…」

ゴンッ！！

「いったっ〜！！！」

「おい…孝太郎。俺は誰だ…？」

「え…」

」

雅人は拳を孝太郎の胸へ押し当て優しい声で言う…

「俺は山本雅人だぞ…？俺がケンカで負けたの見た事あるか！？」

それだけで孝太郎はその言葉の指す意味を理解した…

全てを納得した孝太郎は足早に待つ人の元へ向かう…

雅人はその姿を見送りそして歩き出す。

「雅人！！」

孝太郎の突然の声に振り返る。

そこには親指を立てた右手を掲げる孝太郎の姿があった…

フッ…と軽く雅人は笑いそしてそれに応えるように…

「負けねぇよ…」

親指を高く掲げる…

親友を信じた故の行動…孝太郎は雅人の全てを信じその場を後にした…

「てか…なんて最悪な日なんだろな…ありえねぇ」

ひびの入った日本刀を杖の代わりに雅人はおぼつかない足取りで進む…

そして気がつけば杏樹の元へとたどり着いていた…

まるで例えれば白雪姫のように眠る杏樹。その姿は神秘的な雰囲気さえ放っている…

「おい…杏樹。終わったー」

声はそこから出せなかった…
何か異様なモノの存在を感じたからだ…
それは先ほど戦ったヴァンパイアともあの狼の姿の杏樹でもなく…
全く異質なモノだった…

「おい！！杏樹！！」

思い切り杏樹の体を揺さぶる…だけど期待に答える事無く全く反応
はなかった…

そしてそれは姿を現す…

首の刻印が黄金色にまがまがと光り始める…

そして杏樹の体は赤黒い闇の光に包まれるとともに宙へと浮いた…

「杏樹！！くそ！！おいっ！！杏樹をどこに連れてくんだ！！」

雅人はソコに存在しないモノへと罵声をあげる…

次第に杏樹の姿はそのまがまがしいオーラを掌握しようとしていた…

「クソっ！！杏樹！！あんー」

雅人の体に走る違和感…それはすぐに理解出来なかった…

「え…」

やっと回ってきた痛み…それは丁度左胸の位置からだった

「なん…だよ…これ…」

胸へと突き刺さる黒く巨大な何か…

それは杏樹の体から生えているようだった…

「あ…ん樹…？」

大量の吐血…そして左胸から絶え間なく溢れ出る血液…

雅人はまさに今起きてる事態を理解する事無く力尽き…そして倒れた…

（終わり…か…案外あっさりしたもんなんだな…）

体中が冷たくなるのが自分でもハッキリと分かった…

（ごめんな…姉貴…孝太郎…）

そして…自分が守りきれなかった者の名前がふと頭によぎる…

（杏…樹…）

そこで雅人の意識は途切れた…

少女は立ち上がる…

無垢なるその瞳は鮮血の朱へ…まるでこの世の終わりを示していた…

体に纏いしそのオーラはまがまがしく赤黒く輝きだし、周りの草木にわたる全生命のはかなき命をことごとく喰らっていた…

ふと、少女の瞳にかの者が映る…

「……」

その瞳に映るのは1人の少年だった…

少年は何も語らなかった…
そして少女も何も喋る事はない…

今の少女には何の感情も存在しない…

それでも少女の心の断片には少年の記憶があったのかもしれない…

「……」

少女の瞳からはなぜか涙が出ていた…
なぜそんなものが出ているのかは少女にも分からない…

「……」

そしてその涙は瞳と同じ朱に染まる…

「ぁぁア…」

そして少女の全てが砕け散る…

「アアァ…ァアあぁアアアぁあアー！！！！！」

真っ黒な光が少女を包む…
それは真夜中の暗闇より暗かった…

少女の悲しみにも似た悲鳴が辺りにこだまする…それはまるで死へといざなう歌声だった…

そして刻印は解放された…

雅人はもう起き上がる事はなかった…

辺りに叫び声がこだまする…

だか雅人がそれに気づく事はない…

しばらく叫び声が響いていた…

そして一変し静寂が訪れる…

雅人の頬に伝う、かの少女の朱に染まって涙。

その涙は何かに動かされるかのように不意に雅人の頬を垂れ始めた…

そして……

満月はただ輝き…満天の夜空の星を見つめる。

その星々は音を立て砕け、そして地へと落ちた…

第9夜　ー刻印ー（後書き）

え～と…まず…すみませんm（u_u）m

更新が遥かに遅くなってしまいました…（＜_＞）

予想以上にまいった作者です！！

ホントマイッタ…（＊u_u）

お許しを…（＜_＞）

あと…こんなに遅れたのに読んでくださった皆様…大変感謝感激です！！

あと少しですのでこの哀れな作者にどぅか…最後までお付き合いください！！

宜しくお願いします！！

何かとお騒がせな作者でした（＜_＞）

第１０夜　ー光ー（前書き）

皆様覚えておりますでしょうか？
ダメダメ作者のＲｅｖです…
ｍｉｄＫｎｉｇｈｔ　ｔａｌｅやっと更新出来ました！！ここまで来るのに長かった～（，，Д、）

はい…今回はとても長いです…果てしなく（Θ＿Θ）
それでも読んでくれる心の広いお方がいてくれれば…この作者泣いて喜びます！！

では…読んでみて下さい！！（お願い！！）

第１０夜　ー光ー

同刻…東京

「昨日、国会議事堂で内閣総理大臣の……
え～只今速報が入りました。……緊急事態のようです。それでは変わります。現場の徳永さん？」

『はい。こちら現場の徳永です。皆様落ち着いて聞いてください！！こちら現場では只今悲惨な光景が繰り広げられております！！多数のテロリストと思われる集団による暴動が行われ都市は混乱状態、多数の死傷者が…悪夢のような光景が広が…なん…だ……あれは―』

「徳永さん？徳永さん？え～通信状況が一時悪くなったようです。何が起こったのでしょうか？確認を急ぎます。
……なんです！？現在放送局全体に多大な揺れが確認され―！！」

５分後…

「かぁさん！！」

玄関のドアをバタンと開ける。

孝太郎はあの後待ってくれる母の元へと走った。

「こう…孝太郎！！孝太郎！！よかった…よかった…あなたがどうなってたか心配で…」孝太郎の母は玄関の壁によっかかる形で孝太郎の帰りを待っていた。

「よかった…本当に…」

「母さん…」

勢いよく飛び込んできたにも関わらず孝太郎の母は孝太郎のその体に力無く倒れ込む形で受け止められた。

「ごめん…」

「いいの…大丈夫」

孝太郎は母を腕に抱きしめた状態で窓から外の光景を見る。

そこには先ほどまでの平和な姿は無く凄惨な光景が広がっていた…。ヴァンパイア…ついさっきまで現実離れしていた存在が今では当たり前のような姿でそこにいる…

空に広がる無数のヴァンパイア…そこで孝太郎は親友の姿を思い出す。

「雅人…大丈夫だよね…？」

その時だった…家中に物凄い揺れが孝太郎と母を襲った。

「きゃあああ！！」

「地震！？かっ…母さん！！掴まって！！」

次々と棚や壁が崩れ2人に襲いかかる…
孝太郎は母の手をとり安全な机の下を目指しかける。
さらに地震が強くなる…先ほどまでのものとは比較にならないほどのものだった…今度は立つ事すら出来なくなりその場に倒れ込む。
それとほぼ同時にもの凄い音と共に部屋中のガラスが一斉に割れ孝太郎の母へと襲いかかる…

「母さ…！！」

孝太郎の母はその様子に全く気づいてない様子だった。

（間に合え…！！）

ザシュ…

「あがぁ…」

無数のガラスの破片が背中に刺さり孝太郎はそのままその場に倒れ込む…母は叫んだ後力無く孝太郎のそばに歩み寄った。

「孝太郎…孝太郎！！」

「母…さん。大丈夫だった？」

「何言ってるの！！孝太郎が…誰か呼ばなきゃ…」

バキバキと天井が悲鳴を立ててヒビが入っているのが孝太郎には見えた…

「危な…！！！」

「え…」

思い切り孝太郎は母を押し倒し、倒れた…。

「孝た…！！」

天井のコンクリートが勢いよく落ちてくるのが見えた…

すでに孝太郎にはそのコンクリートの固まりをよける力も無く最後を迎えようとしていた…

（最後ぐらい…ちゃんとカッコよくなれたかぁ…）

そして…時は動き出した…

孝太郎へと向かって落ちるコンクリート。母の叫び…それらが高速で回りだす…。

（ごめん…雅人…）

時が止まったような感覚が訪れる…

辺りに響きわたる静寂の刻…

孝太郎にとって訪れるはずの最後…確実に来るはずのそれが来なかった…

何か鈍い音がしたのは覚えている…それを最後に静寂が訪れたのもわかった。

孝太郎は恐る恐るその瞳を開けてみる…

まるで本当に時が止まったかのような光景が広がっている。

最初…

それを孝太郎は夢かとさえ思った…
何かによって無機質なコンクリートの固まりは空中で止まっている。

そして孝太郎の目にはそれは映る…

もう…会えないとさえ思っていた…

だけど…一度も忘れたりなんかしなかった…

「…雅人！！！」

孝太郎の瞳に映る少年はその右腕で支えていたコンクリートの固まりを軽々と投げ払う。
背中の痛みなど、もはやどうでもよかった…

「雅人！！ねぇ！！まさ…と…」

突然孝太郎瞳に映ったそれは2人の感動的とも言えるような再会を終わらせるには十分だった…

孝太郎の瞳には親友だった雅人が信じられない姿となっていた。

「雅人…その目…何…」

孝太郎の言葉通り雅人のその瞳は普通の人間と異なり黄金色の輝きを発していた…

そしてその口元からは長々と牙のように伸びた歯が剥き出しになっている。両の爪は獲物を狩る獣のごとく固く硬化しており人間のものとは遠くかけ離れていた…。

「ヴァンパイア…そうだろ？孝太郎…」

孝太郎が喋るよりもはるかに早く…雅人は口を開いていた。

「孝太郎…俺は一度死んだんだ…。だけど、俺もお前も…杏樹さえも…こんなわけのわかんねぇ事になっちまって…」

次第に無言になる雅人…孝太郎はそんな姿を見て一歩一歩歩み寄っていく。

「また…行くんだよね…雅人…分かるよ？」

孝太郎は涙ながらにそう言って雅人へともたれかかる。

「俺…あいつの…杏樹の所に行かなきゃ…」

しばらくは空白の時間が続いただろう…

一呼吸おき…孝太郎はいきなり雅人を勢いよく突き飛ばす。

「って…お前何すんだよ！！いきなりいてぇっての！！」

「…なんだよ！！いつもの雅人じゃん！！」

そういきなり笑って答える孝太郎に雅人は軽く笑って返す。

「雅人…」

「なんだよ…」

ガッ…！！

いきなり飛んでくる孝太郎の拳…

ケンカはおろか一度も振るった事もない孝太郎の拳は容易く受け止める事が出来た…

「…なんだよ…いきなり」

「……」

「なんだ？聞こえねぇよ！！」

孝太郎の拳に力が入るのが分かった…

「絶対…負けんじゃねぇぞ！！雅人！！」

孝太郎は精一杯の声でそう叫んだ…

「おぅ…」

雅人は微笑みそう答えた。

2人にはもうそれだけで十分だった…

次の瞬間…部屋全体を覆い隠さんばかりの漆黒の翼が広がる。ガラスや土ぼこりなどが渦を巻くようにして巻きあがる…

そして…気がつけば雅人の姿は消えていた。

呆然と事態をつかめない母を抱きしめ孝太郎は呟く。

「負けんなよ…」

ただ孝太郎は何も言わず…既に雅人の姿無き漆黒の夜空を眺めていた…

町中至る所に凄惨な光景が広がる…
荒廃したビルや倒れ込む人びと。悪夢から逃げ惑う人びとなどがうかがえる…

突然…甲高い悲鳴が辺りに轟いた。
そして雅人はそれを目にする…

「ヒァあ…あ……あ…」

「あいつは…」

悲鳴をあげていたのは茶髪のヴァンパイアとの一戦から姿をくらましていたあの金髪男のヴァンパイアだった…

「あれは…杏樹の！？」
金髪男のヴァンパイアの体の周りを這っているのは杏樹の刻印が解放した時…そして雅人の命を一度奪ったあの黒い腕のような触手だった。
雅人は考えるよりも早く行動していた。
例えそれが恨むべき敵だとしても…

「うぉおぁぁー！！」
一閃…その硬化したヴァンパイアの爪は黒い触手を捉える…
ズシュ…と音がした後勢いよく紫色の体液が触手から流れ落ちる。
それと同時に金髪男のヴァンパイアは力無く宙へと舞った。
雅人はその漆黒の翼を急激に回旋させ急降下し、ヴァンパイアの体をゆっくりと受け止める…

「お前は…」

「今は黙ってろ…後でたっぷり聞くことがあるからよ」

そう言って翼は宙を舞う…
ひとまず崩れたビルの陰へと隠れる事にした。

「さてと…何でこんな事になってるんだ？杏樹の刻印はお前らヴァンパイアにとって切り札なんじゃないのか？それが杏樹はなんでお

前らを襲ってんだよ…」

「なんで…俺なんか助け―アヒァ！？」

金髪男のヴァンパイアが言い終える前に雅人はその首もとを掴みあげる。

「お前…立場わかってない！？いわゆるお前は人質だぞ！？質問してんのはこっちなんだよ！！」

「アヒァ！！ハハ！！ゲホゲホ！！」

「……とりあえずさぁ…お前、咳き込むか笑うかどっちかにしたら…？」

雅人は飽きれ果てて深く溜め息をした…

「とりあえず…あそこまでは良かったんだよ…」

「あそこまで…？」

「あの娘の刻印が解放して…あとはシュベルヌの指示で俺らがそれを操る…ただそれだけの単純な事だったのに…」

「シュベルヌ…？」

「アンタがさんざんお世話になったやつさ…アイツだよ」
雅人にはそれが誰なのか一瞬で理解出来た…今目の前にいるこのヴァンパイアなどとは異なった非なる存在。先ほどまで生死を賭けて戦ったヴァンパイアである。
「今回のこの馬鹿げた計画…アイツが立てたんだ…あの刻印を操るだって…！？ホントに馬鹿げてやがる…そうだよ！！アイツが全て上手くいくから…これで全ての実権は俺の手に入る…そう言ったから…」
続けてヴァンパイアは立て続けに喋り続ける。
「それが…いきなり暴走して…こんな事になっちまった。アイツもあんたにやられて仲間もみんな刻印に食われちまった…」
「…俺が…」
「え…」
雅人はいきなり立ち上がり答える。
「俺が杏樹を止める…これ以上…誰も傷つけてたまるかよ」
「無理だ！！俺達はアイツに近づけやしなかったんだ！！」
雅人の拳がギュッと握りしめられる…
「俺があいつを救わなきゃ…誰があいつを救ってやれるんだよ…！！」

初めて杏樹を見た時から分かっていた…杏樹は自分自身に怯えていた。

夜を恐れ…

力を恐れ…

そして刻印を恐れ…

それは自分も一緒だった…

「俺は…あいつと同じなんだ…！！

あいつはずっと一人で自分の闇と闘ってきたんだ！！」

雅人の拳からは血がにじみ出ている…

「俺が…杏樹を守る…」

ヴァンパイアはもう何も喋らない…

ただ1人の少年の姿を見守るだけだった…

そして雅人は飛翔した…
全てを終わらせるために…

次々とビルの谷間を越えて雅人は杏樹の元を目指す。
金髪男のヴァンパイアの話は本当らしかった…至る所にヴァンパイアの無惨な姿が見受けられる。
「杏樹…くそっ…！！」
なぜあの時助けてやれなかったのか…雅人は自分の無力さを呪う。
「待ってろ。杏樹…今俺が助けるから」
その刹那…何かが雅人の横を目にも止まらぬ速さで通り過ぎ―
「なっ…！？」
通り過ぎたかと思ったら次の瞬間にはそれは雅人に一直線の軌道で向かってくる…
（間に合わ……）

「がぁぁぁ…！！」

雅人はそれを正面から受け止めた…有り得ない衝撃がその体に加わる。

「ぐっ…ふっ…！！」

直下のビルへと叩きつけられる…ビルのコンクリートはバラバラにくだけ辺りにその破片が散りばめられ雅人の体はその残骸へと埋もれた。

おそらくそれだけで人間はその体が耐えられなくなり…結果絶命するだろう。

そう…人間では…

雅人は改めて自分は人間ではないのだと実感する…

「…っくしょう…何だってんだよ！！くそっ！！」

再び雅人は翼を広げて空へと羽ばたいた…

ビルの外へ飛び出すと無数の触手が一斉に雅人へと襲いかかる

「しつけぇんだよ！！」

一瞬…雅人はそれらをほぼ一瞬のうちにその爪で切り裂いた。

そこで雅人はその少女の名前を呼ぶ…

「杏樹…！！」

雅人はその姿を目にする…

空へと浮かぶあまりにも巨大な漆黒の球体…その大きさは隣接するビルの大きさなど比較にならないものだった。まがまがとしたオーラと周囲に無数の触手を纏ったその球体の中心に杏樹のその小さな体はあった…

「杏樹！！聞こえねぇのかよ…杏樹！！」

雅人の叫びは全く杏樹には届いていなかった…

もはや刻印の力は杏樹の精神まで支配しているようだった。

「くっそ…聞こえねぇってか…」

雅人の両手の爪がびきびきと音をたてて硬化していく…その獣の爪は徐々に凶器へと発展していく。

「うぉらぁぁー！！」

雅人はその翼を収縮させ球体へ向かい一直線に弾丸のごとき速さで飛翔する…

刻印は本体をやらせまいと無数の触手がひとかたまりの束になりさながら一本の槍のように雅人へと襲いかかる…
雅人は人間離れした反射神経でそれらをよける…そして驚異的な力を目の前の触手へとふるう…
硬化した爪を触手へと向け下から思い切りアッパーの形で振り上げる…！！
その斬撃によって巨大な触手は地面へと切り落とされた。

「次っ…！！」

先ほどの結末には目もくれず遥か天上にそびえる漆黒の球体を見据える…

その時膨大な衝撃波が雅人の体を襲う。

「がぁあ…！！あん…樹…」

そのあまりにも圧倒的な力の差に雅人は地上へ羽を奪われた鳥のように堕ちる…

「なん…でだよ…杏樹…！！」

その答えはすぐに出た…

（だめだよ…雅人君…）

雅人の耳には聞き慣れた声が聞こえた…

「…あ…杏…樹？」

その言葉は直接雅人にではなく雅人の意識へと伝えられたものだった。

（もう…遅かったの…全てが…）

「何が…だよ…杏樹…何が遅いんだよ…」

雅人は杏樹の言葉に愕然とする…

（もう私の意識すら保てなくなってきたの…私には刻印は制御すら出来ない…だから刻印が解放したらもう…終わり…世界が滅びるって―）

「あきらめんじゃねぇ！！」

荒廃した辺りに雅人の叫びがこだまする…

「お前が諦めたらそこで終わりなんだよ！！最後まで…諦めんな！！」

その言葉に杏樹はニコッと笑ったように…雅人にはそう見えた…

「ありがとう…雅人君…私…みんなと少ししか一緒にいられなかったけど…楽しかった…！！」

それは…紛れもなく雅人の意識などではなく直接雅人へと伝えられた言葉だった…

「だから…忘れないでください！！私が此処にいた事…みんなの事も私…絶対に忘れません！！」

その言葉の意味は最初…雅人には分からなかった。

「お前…何言って…」

杏樹はニコッと笑い淡々と喋る…

「私…最後の力を振り絞って刻印の力を直接私にぶつけて…それで…全てを終わらせます…」

それはつまり…

「ふざけんな！！」

「でも…もうそれしかないの！！だから…」

「だからって…勝手に終わらせんじゃねぇよ！！」

その瞬間…雅人は漆黒の翼を広げ大空へと駆ける。

「まだ…終わってねぇんだよ！！」

球体から無数の触手が飛び出し真っ直ぐに向かってくる。

その狂気を雅人は避ける事なく杏樹へ飛翔する。

（ねぇ…お父様…雅人君がヤッパリ私の光だったんだね…）

杏樹の両の手に力が宿っていく…

再び刻印の力が動き出す…

（これでよかったんだよね…）

杏樹の視線の先にはかの少年がいる…

（もう…終わりに…）

「うおぉぉー！！！！」

雅人は駆ける…今まさに終焉を迎える刻へ。

雅人へと迫り来る槍のような触手の連撃…かまわず雅人は進み続ける…！！

「ぐぁっ…！！」

飛び交う触手…その内の一本が雅人の肩へと突き刺さる…

生命エネルギーを吸収しようとする力が雅人の体を蝕んでいく。雅人はおもわず体が硬直してしまった…

雅人が一度怯むとその触手は二本三本と次々に突き刺さっていく。

「……邪魔すんじゃねぇ…！！」

雅人はそれら全てを引き裂き…ねじ伏せる。

「杏樹！！」

そんな雅人を見て杏樹は悲しみを覚える…

「やめて…雅人君…もうダメなんだよ…」

それでも雅人は駆け続ける…

「ダメだよ…ホントに…私のために傷つくことなんかないよ…」

それでも雅人は…

「もうやめて…」

杏樹を覆う漆黒の球体は雅人へと…それは杏樹の悲しみの意志を表しているのか…無数の触手を繰り広げていく。

「杏…じゅ…！！」

「お願い…もうやめて！！雅人君！！」

見る限りボロボロになりながらも杏樹へと向かい飛ぶその姿は凄惨で嘆きすら感じさせるものだった…

「もう…いいから…」

杏樹の声が弱まっていく…

「待ってろ…杏樹！！」

それでも雅人は飛ぶ事を止めなかった…

『もう…遅いイの…』

その時…杏樹の刻印の魔力が増大していく。

「な…」

杏樹を取り巻く空気がいきなり変わる…杏樹を覆う球体は赤黒く光りその渦巻く魔力は醜悪なものへと変化する。
街に生える樹木のそのことごとくが生命エネルギーを吸収され球体へと取り込まれていく。

「なんなんだ…これは…」

『来タノ…トキが…もうオしマイ…もウ私の意識も…』

「杏樹！！」

しだいに薄れゆく杏樹の意識…

『オシまイ…モう…』

杏樹が右手が雅人に向けられ…突然巨大な衝撃波が襲いかかる…

「ぐぁあぁッッ！！」

さっきの衝撃波などまるで比べものにならないほどだった。

「ぐぁっ…あ…あぁ…！！」

『終わリダ…』

雅人すらあきらめるほどの絶望的すぎる力の塊。
まさに…時は終わりを告げようとしていた。

その時だった。

『…あ…ア…あぁ…』

いっこうに終わりの来ない夜の静寂…

「…な…んだ…？」

明らかにさっきの感じと違い杏樹の様子が違って見える…
何かに苦しんでいる…そんな感じだった。杏樹のその体は何かによって束縛され四肢の全ての自由を奪われていた。

その時…

「聞こえますか…雅人君…」

「杏樹…」
杏樹の口からその言葉が直接聞こえた…辺りは一瞬のうちに静まり返りさっきまでの悪夢がまるで嘘だったようにも思えた…

それほど杏樹の言葉は優しかった…

「もう…これが最後になります…彼女を…刻印を止めてあげられるのは…これが…。雅人君、最後にお願いがあります…」

辺りが静まった時…その言葉は伝えられた…

「お願い…私を殺して……」

たったそれだけの言葉だったが雅人には十分すぎるほど重くのしかかった…

『最後ニ…雅人君に言いタい事があります…』

最後に杏樹は笑って見せた…

『ありガとう……』

それが杏樹の…最後の言葉だった…

雅人はその体を起きあがらせる…

それと同時に体には力が入っていた…

辺りの空気が再び元のものに戻る…黒くよどんだものに…

そして…最期の時が静かに訪れようとしていた…

ジャ……

雅人は左足を一歩踏み込みそれから右手の爪を硬化させる…

雅人は今までになく自分自身が凶器へと変化していくのが感覚がした―

一歩一歩…数センチにもみたない一歩だったが確実に距離は縮まっていく。

その姿はまるで野獣だった…

ヴァンパイアと対立した時初めて分かった…自分はこういう生き物なんだと。

真夜中の月明かり…ただそれだけが辺りを支配していた…

そして対峙する…

「杏樹…」

雅人はそう言ったきり後は何も喋らなかった…
硬直しかけた筋肉が再び異常なまでの熱を持ち始める…
その金色の瞳には杏樹しか映らない。
爪はビキビキと音を立てその形状は爪から剣のように変化を遂げる。
背中の漆黒の翼は全体にまんべんなく血管のような筋を張り巡らしていく…

そして…雅人の獣は解放される。
雅人は目にも止まらぬような速さで飛翔する。
真っ直ぐ―真っ直ぐ…弾丸のごとき速さだった。人間などには反応すら出来ないだろう…
２人の距離は残り３０メートルほどに縮まる…雅人にとっては数秒で届くような距離だったが、再び触手がその道をふさぐために立ちはだかり…そして雅人へと襲いかかる。
蛇行するように様々な方向から向かってくる狂気。
その一撃一撃を雅人は全て避ける事なく突き進む。
一撃目はなんとか当たる事なく終わった。だが…次の二撃目は肩部へと…三撃目は左腕へ…四撃目は左の下腹部へ…
今の雅人は恐怖や痛みの感情すらなかった…
ゆえに真っ直ぐ杏樹へと向かい駆けていく…
刻印は無言のまま球体から雅人の体長を軽く超えるような丸太のよ

うに太い触手を振るう。

雅人はそれを真上から直撃を受け球体手前に位置するビルへ叩きつけられる…

そして終わったと刻印は確信し攻撃の勢いを止める…

『……ッ！！』

雅人は真っ直ぐな目で杏樹を見つめていた…

『ナ…に…』

そこで刻印はありえない光景に動揺を隠せず声をあげる。

雅人は何事もなかったかのように立ち上がり再び翼を広げる。

ゆえに刻印は思う…少年の目はすでに獣と化している…

だから…少年は全てを終わらせようとしている。

刻印は初めて感じ取った…

これが…恐怖

確実にせまるその恐怖に耐えきれずさらに丸太のような触手を振るいおろす。

ザシュ…！！

『…ッッ！！』

その触手は鈍い音とともに地面へと墜ちる…

雅人の鈎爪には触手のものと思われる血液が滴り落ちていた…

それとほぼ同時に雅人は空へと駆け出した。

真っ直ぐ…距離はどんどん縮んでいく。

『ク…来ルナ…来るナ…！！』

刻印は両の手に貯まっている魔力を解放する…

漆黒の球体から無数の黒い針のような突出物が休む事なく吐き出される。

それは雅人へ向かい飛び交っていく。

雅人は右腕を前に掲げた…

次の瞬間、雅人はその右腕を振るう。

たったそれだけの行為で辺りにはけたたましい轟音と共に凄まじい

衝撃波は走る…

たったそれだけの行為で…黒い針は全て存在自体なかったかのように消え去っていた。

『あぁあアァァあァア！！』

雅人に恐怖し刻印は間おかず触手を奮い立たす…

もう…それは全て無駄だった。

再び雅人が右腕を一振りするだけで全ては消え去っていた…

すでに刻印に戦う気迫は無くただ怯える形となっていた。

『いヤ…来なイデ…』

頭を抱え刻印は悲鳴に似た声を出していた…

もはやその姿には先ほどの悪夢のような光景は存在しなかった。

（分かってた…雅人君なら大丈夫だって…ねぇ…もう終わりにしよう）

杏樹の意志は刻印に語りかける。

『イヤだ…いやダ…いヤだ…！！』

（苦しいんだよね…君も…でももう終わりだから…）

『アああ…ァぁあ…』

そして時はやって来る…

一閃…漆黒の球体に斜めに線が入る…そして勢いよく球体から紫色の液体が吹き出す。

一歩…また一歩と歩みを進める狂獣がそこに存在した。

『イヤ…いャ！！イヤダょ！！』

今までに体感した事のない狩られるという事。

もはやその空間に逃げる場所など無くただ恐怖に怯える。

理解し―そして絶望した。

終わりだと…

雅人が近づく音がする―いや、すでに雅人はそこにいた。

初めて体感する恐怖に刻印は泣き叫びそれを放つ…

『イゃあアぁァ！！』

その一筋の触手は雅人の心臓の位置に突き刺さり生命エネルギーを吸収しようとする…

だが…ソレはまるで意味をもたないかのように雅人の前では無力だった…

雅人は再び歩みを始める…そして杏樹の元へと辿り着く。

雅人は当たり前のような動作で両の手を掲げた。

その手の先には獣のような鈎爪がまがまがしくきらめく…

『……ヒぃ…』

禁忌の子としてこの世に生を持った生まれたその子は両親にその存在を恐れられ…そして殺された。

両親は村の掟に恐れ禁忌の子と処された幼き生を奪った。

その子は生きたかった…ただそれだけだったのに…

そして今…刻印の子は怯えていた。

『……イゃダよ…』
刻印は怯えていた…再び命を奪われる事に。
爆発する刻印の魔力…その残り全てを雅人に向ける。
それは槍のように鋭利で破滅的なものだった…
そのことごとくが雅人へと突き刺さる。

「がぁっ…！！」

それだけだった…

全ての魔力を持ってしてもそれは雅人の膝をつかせる事しか出来なかった…

もう刻印に力は残っていない…

もう終焉を待つ事しか…

ジャキンと音を鳴らし鋭い鈎爪を高々と掲げる雅人…

「杏…樹っ…！！」

一瞬…そこに存在する全ての者にとって時が止まったような感覚が訪れる。

そして…刻は動き出す…

雅人はその漆黒の翼を広げ全てを解放し爆進する
弾丸のごとき速さによって刻印との距離を一気に距離が縮まっていく…！！

刻は終焉へ向かう

『…イ…いゃダよ…イやだよぉ…』

そこで雅人の動きは止まっていた…

『…死にタく…ない…ょ…』

次の瞬間…

雅人は杏樹を抱きしめていた…

「もう…大丈夫だから…」

その温もりは聖母のような温かさであった…

それは杏樹の意志だろうか…刻印の意志だろうか…気がつけば杏樹は泣いていた…

天へと声を高らかにあげ…まるで赤ん坊の産声のような…まるで歌声のように澄んだ声で泣いていた…

「君も…怖かったんだよな…もうここは怖くないよ？大丈夫…」

そう…雅人は気づいていた…

刻印もその深き闇に怯えていたのだ…
戦い…交わって初めて知った刻印の子の痛み…
「君の痛みは俺には到底分からないかも知れない…だけど…」
雅人の抱きしめる腕に自然に力が入る…
「だけど…もう一人で苦しむ事はないんだ…
もう…怖くないから…」

夜空に輝く満月を刻印は最後に目を焼き付けた。
『……』
その言葉を最後に刻印の姿は消えていった…
徐々に元に戻っていく杏樹の姿…
その首もとには刻印のアザがうっすらと残っていた。

それはこの戦いの終わりを意味するには十分なものだ。
刻印は最後こう言っていたのを雅人は覚えている…

『ありがとぅ…』

刻印…いや彼女にとってそれは精一杯の気持ちだったろう…

「終わった…か」

そして雅人も夜空の光に照らし出された満月を見つめ…そして杏樹の姿を見た…

「おい…終わったぞ？起きろって」

反応が無かった…疲れて寝ているのだろう。
最初は雅人もそう思った…

しかし…

「杏…樹…？」

杏樹はそう…眠るように…

「お…おい！！ふざけんな！！起きやがれ！！」

雅人が叫ぶ、と同時に雅人と杏樹を覆う球体にヒビが入り…そしてガラスが割れるような音と共に崩れ去った―

「杏樹…！！」

手元を離れ力無く宙をさまよい落ちていく杏樹を雅人はとっさに決死の思いで捕まえる…

雅人は翼を広げようと力を入れる…

しかしすでにさっきの戦闘で全ての力を使い果たした雅人にはたったそれだけの事すら出来なかった…

「な…！！」

高速で地面へと近づく体…

雅人は杏樹を両手でガッシリと確かに抱え体を反転させる―

「…がっぁぁあ！！」

恐ろしい勢いで雅人は地面へと叩きつけられる…

杏樹の体をかばってそのまま背中から地面に激突した雅人は、自らの四肢がバラバラになるようなほどの激痛が走る―

その痛みは今まで体感した中のどれにも勝るものだった。

「がっ…！はっ…がっ…」

呼吸すらマトモに出来ないほどの痛みで一瞬意識が飛んでしまいそうだった…

「…っそ…まだ人間らしいとこが残ってたってか…？」

先ほどまでまるで感じなかった痛みが今になって再び蘇る…

「もう…動けねぇ…っての…」

全身の力が抜けていくような感覚…

もうこのまま自分は終わってしまうのだろうか…雅人はそれほどに思った。

「結局最後はこんなんかよ…」

ため息に近い息を吐き出し雅人はその終わりを待った…

そこでつかの間の時は途切れた…

雅人の薄れゆく視界の中にソレは映る―

「…ヴ…ヴァンパイアかよ…」

信じられない光景が雅人の目に焼き付けられる…

ざっと視界に映るだけでその数は５０と下らない。

「じ、冗談じゃねえぜ…こんな体じゃ…」

自分の体を伺う…だがそれよりも先に自分の腕に抱いているその者を見ていた…

「杏樹…！！」

自然と拳に力が入っていた…

さっきのように爪は硬化せず今となってはヴァンパイア…いや人間以下ほどの力も残っていないのは雅人にもよく分かっている…

だけど―

「あぁあぁぁーッ！！」

雅人は勢いよく飛び出し足がもつれながらもヴァンパイア達に向かいボロボロになったその拳を振るう…

土埃や泥にまみれた雅人の体がまた泥に汚れる…

ヴァンパイアへ向けた拳は見事なほどに避けられ雅人は力無く転んだ。

「っらあぁっっ！！」

その後も2撃…3撃と休まずに振るい続けるが…結果は分かりきっている。

雅人はそのうち力尽き地面へと転がっていた…

「こんな…」

すでに立ち上がる力すら残っておらず雅人はその拳で土を握りしめ血を滲ませながら言った。

「こんな拳で何が守れるって言うんだよ…！！」

その問いにヴァンパイアはおろか誰も答える事は無かった…

一瞬…静まる空気…

それは初めて刻印と対峙した時のような感覚だった。いや…それ以上かもしれない。

ソレは突然姿を表した…

あるいは初めからそこにいたのかもしれない…

ヴァンパイア達はその姿を見るなり即座に片膝をついて完全に服従を意味する姿勢を保つ。

ソレはハイヒールの高らかな足音をたてながら雅人の前へとやって来た…

「まだ…戦うのですか…？少年よ」

漆黒の夜闇のように見事に塗りつぶされたような腰までである長い黒髪…
恐怖すら漂わせる妖しみを放つ金色の瞳から繰り出される笑顔の絶えない顔立ち…

それら全てがそれだけで雅人を恐怖させた…
全身に虫が張り巡らされたかのような悪寒…

それは紛れもなくヴァンパイア…その姿だった…しかし普通のヴァンパイアなどとは何かが…いや全てが違った…

「これ以上の戦いは何も生み出しませんよ…？少年」

その言葉が発せられると同時に雅人は再び地面へと叩きつけられた。

「がああぁぁっ！！」

指を動かす事すら許されず雅人は大の字で地面に拘束される…
雅人のその姿をマトモに見る事無くそれは杏樹の元へと歩む…

不意にソレは足に不可解な感触がする事に気付く…
雅人はソレの足を必死の思いで捕まえる。
ソレはまるで軽薄に雅人を虫を見下すかのように視線を合わせた。
振り払えばなんて事のない力だったがそうさせなかったのは雅人の
その目だった…

「杏樹に手を出すな…」

まるで野獣のように研ぎ澄まされたその目は浴びただけで絶命しそ
うなほどだった…

「少年よ…何があなたをそこまで動かす…」

雅人は真っ直ぐな瞳でソレを見つめ答えた。

「…そんなの分からねぇよ…!!」

確かにさっきまでは分からなかったかもしれない…

だけど…今は答えはハッキリと分かっていた…

「俺はコイツの…杏樹や刻印の痛みさえ分かってやれてねえ…
だけどな…そんな俺でも一つだけハッキリ分かったんだよ…!!」

雅人は残った全ての力を振り絞り…そして立ち上がった。

そして…その言葉は辺りにこだました…

「俺は…杏樹が好きなんだよっ…！！！」

雅人は杏樹を左腕で抱き抱えソレへ対して叫ぶ…

『パチパチパチ…』

不意にこだまする拍手…

「立派になりましたね…雅人」

全く予想もしていない言葉だった…

それだけにその言葉が何を意味しているのかすら分からない…

「なん…で俺の名前を…」

「なんで…？そうですね…分からないのも無理はありませんね…」

全く意図が読めないその言葉に雅人はかなり戸惑いを隠せない…

心の準備すら出来ていなかった故に次に出てきた言葉は驚愕的なものだった…

「私はアナタの母です…雅人…」

雅人の思考が一時的に停止する…

「そう…あなたはヴァンパイアの息子…そして私はヴァンパイアの真祖…アルベリウス　エル　ヴィレイナ…」

何もかもが信じられない話である…
おそらく仮に街行く通行人１００人に言ったところで誰も信じる事はないだろう…
だが…雅人はそれら全てを目撃してきたのだ…

「あんたの話を信じる根拠は…？」

「アナタのその姿…その力…それだけで十分じゃないかな？」

軽く笑って返事を返す…ソレに雅人は軽くため息を吐いて下を向いた。

「なんだよ…こんなとこなんかで感動の再会ってやつかよ…」

そして雅人はソレを…母を見て答えた…

「お帰り…そして…ただいま。母さん…」

「ただいま…雅人」

ヴィレイナは雅人を抱きしめた…それはヴァンパイアの真祖としてでわなくただの母としての行動だった…

「ごめんなさい…私がいない間にこんな事に…」

ヴィレイナは再び杏樹の元へと歩む。

「この事態を起こしたの者の名はシュベルヌ…我がヴァンパイアの部族の中でも群を抜く能力の持ち主でした…雅人、アナタと戦ったのが彼です。彼の勝手な判断でこのような事態に…」

そう言いながらヴィレイナは長い長い眠りについている杏樹へと手を翳していく…

「これは私に出来る唯一の償い…」

ヴァンパイアの真祖であるヴィレイナはその力を発生させる…
すると杏樹の体を纏うかのように白色の球体が包む…
それはまるで刻印の力によって杏樹を覆った漆黒の球体とまるで対を成していた…

ヴィレイナはそれに向かい息を一吹きする…そして杏樹を覆う白色の球体はガラスのように崩れ去った…

それはまるで生命の息吹きのように…

「まさ…と君…」

「杏樹…！！」

二人にはもはや言葉などはいらなかった…

「よかった…」

「ゴメンね…雅人君…私のせいで…」

雅人は杏樹を力の限り抱きしめる…

「大丈夫だ…もう…」

強く…

強く…

雅人は杏樹を離さなかった…

「…ちょっと申し訳ないけど割り込んでいいかしら？」

ヴィレイナのその言葉に二人は勢いよく離れ互いに顔を赤くした…

「あらあら…」

ヴィレイナは苦笑しながら言った…

「杏樹…アナタへと渡すものがあるの…」

「あな…たは？」

母はニコッと微笑みその呪文を唱える…

「ＥＬｒｉｓ…ｖａｌｌｅｌｇａｌｐｒｅｔｔａ…」

優しいその声から発せられる音色はまるで子守歌のようだった…

最初はその呪文に気づかなかった…だけど忘れるはずもないその呪文はあの日に…

そうそれは狼人族に古くから伝わるあの呪文だった…

「ｓａｍｅｔｙｖａｎｉ…Ｌｅｓ…」

そう…それの意味するものは…『転送』

「お…父様…」

杏樹の瞳から涙が溢れ出る…

「お父様…！！」

「杏樹！！」

幾度と無く夢見てきた親子の再会…邪魔するものは1人としていなかった…

「お前は…」

杏樹の父…エルンの視界にヴィレイナの姿が映る…

「あなた…！！」

ヴィレイナのその言葉に今度は杏樹までも…二人揃って固まる。

『えっ…』

ヴィレイナは軽く微笑みかけ二人へと伝える。

「あら、二人には伝えてなかったわね…私達はそう、夫婦なの…そしてアナタ達は…」

『ちょっ！！ちょっと待っ…！！』

次の言葉は大体予想が出来た…そして二人の思考は同時に停止する…

「兄妹なの」

いきなり告げられた真実はあまりにも過激的で残虐的なものだった…

「雅人君、いや…雅人。この度は本当に迷惑をかけた。すまない…」

「私からも謝るわ…今回の悲劇は私の耳に入ってなかったとはいえ…これについて私は全責任を負います」

「イヤ…イイデスヨ！！」

雅人の脳内は酷く混乱していた…

当たり前の事と言えばそうだったのだが…

幼い頃からいなかったと思っていた両親が目の前にいる。

そして目の前にいる男は父であり狼人族の長で…とりあえず狼男なので人間ではない。そして杏樹の父親である…

母は母ですべてのヴァンパイアの頂点に立つ真祖であり、こちらも人間ではない…

二人は雅人の両親であり、そして杏樹は…

（あぁ～！！もうワケわかんねぇ！！つまりはあれだろ！？あれなんだろ！？俺と杏樹は…！！杏樹は……）

そこで雅人は考える事が出来なくなった…
思わずさっき自分の口から出た言葉に冷や汗が止まらなくなり顔が赤くなっていく…
（…こりゃどうしようもねぇな……）
杏樹の様子を見る…
（うわっ…ひでぇ…）
杏樹は頭から白い煙を出し目をまん丸くし口から何か…魂のようなものが今まさに飛び出そうとしていた…
「お…おぃ…杏…」
「はっ！！はひっ…！！」
思わず声をかけたが結果は分かりきったものだった。
杏樹は雅人の言葉に即座に反応し体をビクつかせ再び目を丸くした。
「もう私達がいない方がいいみたいね…あなた」
「あぁ、邪魔みたいだしな…それでは失礼しようか」
『えっ…！？』
それからのヴィレイナの行動は早かった。
辺りへ空気圧の壁が作り上げられ…瞬間…巨大な翼が轟く。

「もうお邪魔みたいだから失礼するわ。あとはアナタ達が話し合いなさい」

有無を言わさず突風が雅人を阻む…

「ちょ…ちょっと！！これからどうしろと！！あんたら！！」

ヴィレイナはその問いかけに憎いほど爽やかに笑っただけだった…

それと同時に巻きあがる砂埃…

それが止み終わるころには全てのヴァンパイアや父、母の姿は全て消えていた…

そこに残っていたのは…

「……どうしろと？この状況…」

そこには目をキョロンと丸くした杏樹と雅人しかいなかった…

「おいおい…冗談じゃねぇぞ…周りの建物も崩壊してるし俺らだけじゃ――って眩しっ！！」

気がつけば夜が明け太陽の光が差し始めていた…

荒廃したビルや地面に光が灯り始める…

そう…それは生命の光…

『あ…』

雅人と杏樹は同時に声を合わせて言った…
その瞳には奇跡が映っている。

もはや廃墟同然と化したビル群の残骸の全てに光が灯ると同時にその形成を修復していく…

「わあぁ…」
杏樹は魔法を見るかのように不思議な光景を目に収めていた…
薙ぎ倒された木々は元に戻りその緑を取り戻していく…

たった数秒の事だったろうがそれはまるで何分、何時間にも及ぶような光景だった…

全てが元通りに戻った頃雅人は杏樹の元へ歩き出す…

「まっ…雅人君!?」

「ほら……早く掴まれよ…」

雅人は杏樹へ右手を差し出した…

「ほれ…早くしろって…ハズいだろ…」

鼻頭を人差し指で押さえ顔を隠す雅人の姿に杏樹は笑いを隠せず思い切り…笑った…

「っと…笑うなって！！笑うなよ…！！」

「アハハハ…フフフ…アハハハッ！！」

「いや…なんつーか笑いすぎ…」

ゴンッ！！

「ったぁ～！！雅人君…何すんの！？」

「悪い…何かイラッと来た…」

「む～……」

しばらくほっぺをフグのように膨らました杏樹だったが…次には笑顔で言った。

「行こっ！！」

「おぅ…」

雅人はそれだけ答え杏樹の手を取った…

この一夜限りの…おそらく世界をかけた戦いの物語の真実は誰も知らない事だろう…

そしてそれは後世にも伝えられる事は無い…

だけど…

二人は歩き出した…

光の指すほうへと…

第１０夜　ー光ー（後書き）

お疲れ様でした…よく読んで下さいました～（＜＿＞）
ほんとヘタレ作者でスミマセン…
さてこのお話もあと１話でとりあえずおしまいです！！
ラストまで読んで下さる心の広いお方…いてくれればいいな…とり
あえず私も最後まで一生懸命頑張ります！！

Ｒｅｖ　ｃｒａｚｙ　ｄｒｅａｍでした！！

後夜祭　ーエピローグ！？ー（前書き）

やっと最終話更新いたしました～（ρ＿－）ｏ
あぁ…長かった…というか読んでくださった皆様、大変ありがとうございます。

コレがラストですのでどうか宜しくお願いいたします（＜＿＞）
それではどうぞ（≧≦▽≦≧）ゞ

後夜祭　ーエピローグ！？ー

あの日…全ての戦いは幕を閉じた…

その終焉と共にその異常気象とも言うべき満月は消え去った…

同時に雅人はこの満月が全ての戦いの終わりを示していたのだったと理解する…

「しかし…」

戦いの終わり…それは再び平和な日々の訪れを告げる…のだが…

「これは…平和すぎだろ…」

午後１時５５分。普通はこの時間であれば授業で言う五時間目辺りの時間帯である…

確かに授業はしていたのだが、雅人のクラスメートは全く授業を受けるような態度を見せる事なく時を過ごしていた…

（これってどういう事だよ…）

その光景は余りにも不自然である…雅人はあれから普段見るはずもないニュース番組などに全て目を通した。

そこで昨日の出来事を語るような話は１つも出ることはとうとうなかった。

そしてこの教室の現状は…不自然であった。

誰一人昨日の騒動について話してる者は一人もおらず…それどころかいつも以上に騒がしい教室内だ。

昨日の出来事がニュースで報道されないはずがない、その疑問は学校に来てからも途絶える事はなかった。

（こいつら…何も知らないわけないよな。あれだけの騒動が起きたんだー）

「ーーにき！！」

（しかも杏樹は来てないしよ…まぁしょうがないっちゃしょうがないけどー）

「ーにき！！」

（てか…今体ボロボロで疲れはててる俺に追い討ちをかけるようにー）

「ー兄貴！！」

そこで雅人の血管は破裂する…

「んだはぁぁあぁー！！！！何度も何度も耳元で叫んでんじゃねえ！！こるぁ！！」

その瞬間雅人は机を天井近くまで蹴り上げると仁王が如く表情で無

数の血管を盛り上がらせ立ち上がる…
雅人のそれだけの行動によってクラス内の騒音浸透圧は皆無に等しいものになった。
クラスの視線が一点に集まり、雅人へ向けられる。
「あ…あ～こんなところに虫が…いやだなぁ～」
そんなわざとらしい雅人の演技にもかかわらずクラスの大半は恐怖にひきつれたような顔をしていた…
（って…やっちまったな…）
しばらくの間硬直していたクラスの雰囲気が授業をしていた担任の声でようやく元へと戻りまた騒ぎ出す。
雅人は窓際の席でひっそりと身を縮め窓の外を眺める事にした…窓の外には雲一つ存在しない青空が悠々と広がっていた。
昨日の出来事がまるで嘘のようだった…
「兄貴！！」
空耳だと思っていた声がまた聞こえてきた…
（あぁ～もうどうでもいいや…）
コツッ！！

「って…」

いきなり窓の外から小石が雅人めがけて飛んでくる…

「んのやろう…」

雅人は勢いよく立ち上がり窓を開ける。
あまりの衝撃に窓ガラスにひびが入ったが雅人にはなんら関係は無かった…あまりの衝撃に窓ガラスにひびが入ったが雅人にはなんら関係は無かった…
それと同時にクラスの連中が視線を向ける。
雅人はクラスメートを獣の目で睨みつける…すると何事も無かったかのように一瞬で授業は再開された…

「さぁってと…」

ゆっくり…ゆっくりと窓へと近づき身を乗り出して見る…
校庭には誰もいない…
じゃあ誰が小石を投げたのだろう…

その疑問は一瞬で打ち砕かれた。

「兄貴！！」

その聞き慣れた声は窓の下から聞こえてきた…

そこにいたのは…

「おわっ！！お前！！…って確か…」

派手なセクションカラーを施した金髪のよく見ればホスト系ともいえるほどの顔立ちの整った男が満面の笑みで目を輝かせて壁に張り付いていた…ただし普通の人間がそんな事出来るわけない…

ソイツはあの日突然雅人の前に現れた金髪男のヴァンパイアだった。

「俺っす！！兄貴！！」

「なんでここにいるんだ…？」

「兄貴に渡したい物があるんすよ…っと…確かここに…」

そう言うと金髪男のヴァンパイアはジーパンのポケットから紙きれのような物を取り出し雅人へと受け取るよう差し出した。

「これは兄貴のお母様…俺らの真祖のヴィレイナ様からお預かりした手紙です。」

「母さんから…？」

四つ折りにされていた手紙を開くとそこにはこう記されていた…

愛する私の雅人…そして杏樹へ…

今回の大惨事についてあなた達には多大な迷惑をかけたと思います。事件につきましては私は真祖として全責任を償い今回のような事がこれ以上ないよう関わった一部の者以外の全ての者の記憶を消させていただきました…また今回のような事が起きないよう日々心構えるしだいです。

こんな事になった訳ではありますが今回一つ感じた事があります。

あなた達が私の子供で本当によかったです…ありがとう…

ＰＳ．私達は今、日本癒やしの温泉巡りツアーの旅に出かけております。そこで全国津々浦々を旅している訳ですが私が留守の間今回のような事があるかも知れません…困った事が何かありましたらこの手紙を渡したヴァンパイア…シュリアに何なりとお申し付けください。あなたの力となるでしょう。もしもの場合には私も真っ先に駆けつけますので。それでは全国の温泉旅館のお土産楽しみに待っててください。

愛する子供達へ

「あのさぁ…シュリアだっけ…？」

金髪男のヴァンパイア…シュリアは目を丸くして雅人を見つめた。

「あ…兄貴が俺の事名前で呼んで……感動した！！兄貴愛してるっす！！」

（なんかもうこの手紙の内容やら色々突っ込むのも疲れたな…）

「あっ！！俺そろそろ仕事があるんで！！」

「仕事ってお前…」

あらかた予想がついたが雅人はとりあえず聞いてみた。

「ホストっす！！俺兄貴ラヴなんでドンドン貢いじゃいますよ！！」

「もうそれについては突っ込まないぞ？」

「兄貴の気持ちが俺になくても俺は兄貴一筋で行きますんで！！じゃあ仕事行って来まーす！！」

そう言い終えるとシュリアは空の彼方へとスゴい勢いで飛んでいった…

「…てか…ヴァンパイアって日光に当たると死ぬんじゃないっけ…？」

雅人はもうそんな疑問すら持つのも疲れ机へと寝そべった…

「さてと…帰るか…」

何かとインパクトのあった1日だったが雅人にもう考える事すらどうでもよくただ帰路を歩んでいくだけだった…

「なんか考えるだけ無駄な気がしてきたし…」

雅人の人生はある日突然変わった。
それはある少女との出会いをキッカケに…

「あ〜あ…どっからこんな事になったんだろ…」

「雅人君！！」

「そうだよな…アイツと会わなかったらこんな事に……って……」

とりあえずもうどうでもよくなったので雅人はわざとらしいリアクションをとってみた…

「…って杏樹！！あれ〜！？なんでこんなとこに！？学校休んだんじゃないのかよ！！」

「うん…学校休んじゃったけどさ…雅人君と色々話したい事もあるし…」

そう言いながら杏樹は校門の前で恥ずかしそうな身震いをしながら

体をもじもじさせながら身をよじっていた…

雅人は思った…

ナンダコノラヴコメムードハ…

「行こう！！雅人君！！」

「っておわ！！ちょっと待っ…！！」

強引とも言えるほどの勢いで雅人は腕を引っ張られていく…

学校の近くの河川敷…いつも通り慣れたはずの道だったはずなのに…

（……なんだ？この重苦しい雰囲気は…）

辺りには夕焼けが栄えてきており河原の近くで熱血教師が『三年Ｂ〇〜！！』と叫びその生徒達が『金八〇生〜』と叫び青春を謳歌しているような誰もが見た事のある光景が見受けられる…

だがそんな事に目を配ってられるほど雅人には余裕はなかった。

（まじでこの状況…何話せばいいんだ…）

雅人は脳内の全勢力を振り絞り会話を成立させようと脳をなんとか起動させた…

「クラスの連中さ…みんな元気だったぜ…？」

杏樹は首を縦にふり雅人に応えた。

「なんか昨日の事なんてよ、みんな母さんに記憶とか消されたみたいでさ…何が起こったかも知らないみたいで。すげぇよな！！記憶消すとか…やることなすこと派手すぎるっての！？なぁ、杏樹」

またも杏樹は首を縦にふるだけだった…

（気まず…！！）

雅人は心の中で何かに突っ込む…

「…ってかさ！！そういや、ウチの姉貴だけどさ…」

何とか話題を保たせようと雅人は脳内を無理やり高速で回転させる…

「あれからさ、家帰ったら姉貴がアパートの前で泣いててさ…あの姉貴がだぜ！？信じらんねえよな。話聞いたら『お父さんとお母さんが帰って来た…』って言っててよ。姉貴も涙流すんだって言ったらさ、あんなに顔赤くして…まぁ殺人コンボくらって気絶したけどな…全く容赦ねえよ…」

雅人は苦笑しながら話を続けた…

「そういや孝太郎も元気だったぜ！？アイツ…いっつも泣いてたクセに気がついたら強くなりやがって…って杏樹…？」

杏樹の様子がおかしかった…小刻みに体が震えており顔が赤くなっていた。

「おい…杏樹？」

雅人が声をかけたその瞬間…杏樹は雅人の懐へと、かのワールドカップの悲劇の光景のごとく頭突きをかますようにタックルを食らわした…

「…って、ぐばはぁぁぁぁ！！！」

雅人は体勢を崩しそのまま2人は河川敷を転がり落ちる結果となってしまった…

「おあぁぁぁ……お…おい…杏樹…？」

頭突きが懐に直撃プラス思わぬ体勢で転がり落ちた事で死にも似た痛みを体験した。

「ご…ゴメンナサイ！！雅人君！！大丈夫ですか！？」

本日マトモに交わした杏樹との会話だった。

「お前…大丈夫な人に見えるか…？」

「あわわわ！！えぇ！！とりあえずゴメンナサイ！！」

そんないつも通りの杏樹の様子に雅人は笑いを堪えきれなかった…

「ははっ！！やっぱ変わんねえな…お前！！」

「雅人君！！ちょっと笑いすぎだよ！！」

2人は絶え間なく笑った…全てが解放されたかのように…

笑い疲れ…いつしか2人は夕日が落ちるまで河川敷に大の字になって寝転がっていた。

2人で笑い…そして2人で泣いた…いつしか雅人はそんな日々が続けばいい…そう思った…

だけど…

「どうした？杏樹…」

杏樹はいきなり立ち上がり雅人を見つめあげた…

「雅人君…最後に言っておくね…」

「はぁ？お前、何？最後って…」

いきなりの言葉に雅人は驚き起き上がる。

「今日を最後に私は…この街を出ます」

「ふざけんな！！」

雅人のいきなりの罵声に杏樹は体を強ばらせる…

「なんだよ！！いきなりそんな冗談言うなんて！！……冗談……だろ…？」

「今回みたいにまた刻印が解放しないなんて断言は出来ないから…もう誰も失いたくないんです…」

「そんなの…！！俺がまたなんとか――」

雅人の言葉はそこで止まった…

杏樹のその瞳によって…

冗談…そう、雅人は冗談である事を願った…

だけど分かっていた…杏樹はこんなくだらない嘘をついた事など一度もなかった…

学校の帰り道だって…

刻印が解放された時だって…

杏樹のその瞳はいつも真実を語ってきた…

「そっか…」

雅人はそう口に出していた…

「寂しくなるよな…杏樹がいねえと…」

雅人は強がった顔で震えながらわざとらしく苦笑いした…

そんな雅人に杏樹は凛とした声で答えた…

「やっぱり雅人君は私の光だったをですね…私の刻印が、あの解放された時…私は闇の中を1人さまよってたんです…だけど…雅人君が私の光となってここまで導いてくれたんです。本当に感謝してます…」

言葉の途中が力が入らず途切れ途切れになる部分もあった…それでも杏樹は喋るのをやめようとはしなかった…

「本当はあの時ほとんど意識がなかったけど…あの言葉だけはしっかり覚えていました…」

そして…杏樹は最後にこう言った…

「私も雅人君の事が…好きです…」

あの時、雅人は杏樹へと何も言えなかった…
そして本当に次の日から杏樹は学校にも来る事はなかった…
それからの雅人は、ただ…無意味な日々を過ごしていた。
そんな日々でも雅人は自分の無力さを呪っていた…

「くっそ…なんで止めなかったんだよ…」

掛け布団を引きちぎるぐらいの力で握りしめていた…

雅人のアパートはあれから改装され、ほとんど新築とは言えないが前と比べたら天と地ほどの差があった。
雅人はそれから自分の部屋へと戻る事が出来た。

カーテンのない部屋は月夜の明かりによって照らし出され明るかった…

雅人は耐えれなくって起き上がり窓へと近づいた…
窓を開けるとそこには…

「満月…か」

空を一面覆わんとするほどの大きな満月が差していた。

「これじゃ明るいわけだよな…寝れねえし…」

雅人は喉が乾き台所へと向かった。
麦茶が飲みたくなり冷蔵庫へと手をかけた時――

轟き叫ぶマフラーの排気音。
近所でも極めて迷惑だとされているその轟音は…間違いなくヤツのものだった…

「相変わらずうっせえな…姉貴の奴…」

そう言った瞬間バイクのマフラー音がピタリと止まる…それとほぼ同時に鳴り響く音。
それは幸が大股を開いて階段を駆け上がってくる音だった。

「なんで上に…ってまさか！？」

雅人の嫌な予感は見事に的中してしまった…

幸様が部屋の前で止まったんです…

ピンポンピンポンピンポーン！！ガンガンガンッ！！
幸様…私を呼ぶ時はチャイムを鳴らすかドアを叩くかどちらかにしてください…

「こらぁ！！早く開けんかい！！」

「わっかりました！！今しばらくお待ちぶばっっ――！？」

雅人がドアノブに手をかけた瞬間…雅人の目の前にはドアがあった…勘違いしないでほしい…
ドアノブに手をかけたらドアが目の前にあるのは当たり前の事である…だが、雅人とそのドアの距離は零センチメートルだったのだ。
分かっていただけただろうか…そう、雅人はドアとともに吹き飛ばされたのだ。

「ったくよぉ…早く開けないから新品のドアもこんなんなっちまって…」

幸はくの字に折り曲がったドアと、共にくの字に折れ曲がり顔面からおびただしいほどの出血をしている雅人を虫でも見るかのような目で見つめた…

「あ…」

「なんだよ。その目は…」

雅人は虫の息で幸へと叫んだ

「あんたって人はぁぁ―！！」

「はい。うるさい」

一閃…幸の右手が高速で飛んでくる。
向けられたのは雅人の両目…

ドス…

「みぎゃあぁぁ～！！あぎゃああ～！！目が～目が～！！」

幸の放った鋭い目潰しは鮮やかなほどキレイに決まった…

「ったくよぉ…人がせっかくお前に渡したいものがあったからわざわざ来たってのに…」

「…は…？」

幸は居間に上がり込み座布団へどっしりと腰を降ろした。

「茶」

「はい！！只今！！」

そういって雅人が持ってきた麦茶を幸は凄い勢いで飲み干し一息つく…

「あのよぉ…あたしがさっき昔のレディース仲間とバイクで流してたらさ、道路をさまよって歩いてる子犬がいてさぁ。なんかかわいそうだから連れてきたっての」

突然出てきた言葉が…子犬…？
だが…雅人のそんな疑問もすぐに解ける事となった。

再び階段を登ってくる音がする…

（まさ…か…）

雅人は全てを理解した―そしてその音がした方へと走った。

満月の明かりによって映し出された薄い栗色の髪の毛…そして銀色の瞳…

そこにいたのは…

「杏樹…！！」

「―雅人君！！」

2人は駆けた…そして抱きしめた…

もう離さないと…

「バカだよ…お前ほんっとバカだよ…杏樹…」

「うん…ゴメンね…」

2人は満月の光によって照らし出された…
杏樹のその瞳から溢れ出す雫は一粒一粒光り輝いていた…

「さてと…ラブラブな空気になってるってみたいだからなぁ～。あたしはまたバイク流してきますかねぇ～」

「って、姉貴…！！」

幸はいつの間にか横にいて2人の様子をまじまじと眺めていた…

「ほほほほ…仲の良いこと…」

瞬時に2人は離れぎこちない空気が流れ始めた。

「じゃあお邪魔なので失礼しま～す♪」

その言葉を最後に幸は小悪魔的な笑顔を残し去っていった…そして残された2人にはとても気まずい感じしか残らなかった…

『あの…！！』

2人は同時に言葉を発し同時に焦り出す。

「あ…あの！！」

「わ…わりい…杏樹から先に話せよ…」

「じゃ…じゃあ…」

杏樹は後ろに置いてあったダンボールをゴソゴソと漁る。そして中にあるソレを雅人へと差し出した…

「あの…これっ！！引っ越し祝いです！！」

杏樹が雅人へと差し出したのは一個のキャベツだった。

「は…？あのさ…何？引っ越し祝いって…？」

「え…お姉さんに話聞きませんでした？私…ここに引っ越します！！」

「……まず引っ越しの話はいいとしよう…だがなんだ？このキャベツは！？」

杏樹はキャベツの現状を見てみる…すぐにキャベツの異変に気づいた。

「よく見てみろ！！なんだ？この歯形はなに！？食べかけじゃないの！？こらっ！！そんなかわいこぶってもダメだっての！！」

雅人は杏樹のコメカミをグ～リグリとした。

「いたっ！！いた…痛い！！許して！！雅人君！！」

「ったく…もうどうでもいいや…」

雅人は深くため息をつき手すりへと捕まり寄っかかった

「まぁ…これで明日から一緒に学校行けるな」

「うん！！」

「さてと…じゃあもう遅いし寝るか！！ん…どした、杏樹？なんで近づいてきて？あの…杏樹さ～ん。顔が近いですよ～って杏樹！！近いって！！なんか顔近いって！！近い近い近すぎるっての！！顔近――！！」

突然触れ合う2人の唇と唇…
雅人は何が何だか分からなかった…

「な…な…何で！？」

余りにも衝撃的な事態に雅人の思考は混乱するばかりだった。

「これからも私を守るナイトとして頑張ってくださいね！！雅人君！！」

いきなり杏樹から出た一言が雅人をさらに混乱させた。

「いや…ワケわかんないんだけど…俺はいったいどう反応したらいいの…？」

杏樹は口をプクっと膨らませてちょっと怒っているようだった。

「私だって狼人族の姫なんですからね！！守ってくださいね！！私のナイトなんだから！！」

「いや…理由にもなってねえけどさ…頼むから俺の分かるように…って杏樹さ～ん！！都合悪いからってどこ行くの～」

杏樹は満月に照らされながら笑っていた…見たこともないような笑顔で…

そんな杏樹を見て雅人は苦笑した…

「ったく…わけわかんねぇな…ま…いっか…」

満月は輝いていた…

光は2人を照らし…

そして輝きだす…

そして…物語は始まった…

後夜祭　ーエピローグ！？ー（後書き）

終わりましたね…『ｍｉｄＫｎｉｇｈｔ　ｔａｌｅ　ーカノジョは狼女！？ー』

長かった…長かったけどたくさんの皆様に読んでお付き合いいただきこのヘボ作者…大変感激しております！！

この場を借りて言わせていただきます！！

今までご購読いただき本当にありがとうございました！！

ＰＳ．次回作出すかも…！？それについてもご意見ご感想お待ちしております（＊＾－＾）ｂ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6515a/

midKnight tale ーカノジョは狼女!?ー

2010年10月10日02時15分発行